

山梨県韮崎市

前田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県韮崎市

前田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

序 文

本報告書は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された前田遺跡の報告書であります。

韮崎市は縄文時代中期の集落址で著名な坂井遺跡をはじめ、国指定史跡など文化財の多いところであります。山梨県随一の穀倉地帯である塩川右岸の通称藤井平は、肥沃な平坦地で古くより「藤井五千石」と称した水田地帯で、私たちの祖先が遠い昔より生活を営んできた場所であり、今回の調査によりその一端が世にあらわれることになったわけであります。

今回発掘調査を行った前田遺跡は平安時代の貴重な資料が多数得られています。これらの資料が、先人の生活文化等の解明の一助となればと思うと同時に、永く後世に伝えることを責務と痛感致します。


最後に、今回の調査及び報告書作成に当たり、多大なる御理解と御協力を頂いた関係者の皆様方に深甚なる謝意を表します。

昭和63年3月31日

韮崎市教育委員会

教育長 功 刀 幸 丸

例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業に伴う前田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、峡北土地改良事務所負担金、文化庁・山梨県の補助金を受け、韮崎市教育委員会が実施した。
3. 本報告書の作成は、韮崎市教育委員会社会教育課が行い、山下孝司が総括を担当した。
4. 遺物・図面整理及び報告書作成に関わる業務の参加協力者（敬称略）
小田切玲子・山寺保子・深沢真知子・藤巻郁子・石原ひろみ・元木由美子・三井加代子・小林巧・古屋勝・浅川美穂・功刀美穂・大坪重子・末創一・皆川洋・徳永重元・橋本真紀夫・辻本崇夫・我妻良一・斉藤努・本田徹次
5. 遺物整理において、出土鉄器の処理に関しては財団法人山梨文化財研究所・鈴木稔氏、炭化材の同定に関してはパリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得た。
6. 凡 例
 - ① 挿図中のドットは焼土を表わす。
 - ② 挿図断面図のは石を表わす。
 - ③ 縮尺は各挿図ごとに示した。
 - ④ 歴史時代土器断面、白ヌキは土師器、黒は須恵器、網目は陶器を表わす。
7. 発掘調査・遺物整理及び報告書作成に当たり、次の方々から御指導・御協力をいただいた。
厚く御礼を申し上げる次第である。（敬称略）
新津健（山梨県教育庁文化課）、坂本美夫・保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）、谷口一夫・萩原三雄・鈴木稔・河西学・宮沢公雄・平野修・櫛原功一・広瀬千江美（財団法人山梨文化財研究所）、十菱駿武（山梨学院大学）、畑大介（甲斐丘陵考古学研究会）

調 査 組 織

1. 調査主体 韮崎市教育委員会
2. 調査担当 山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）
3. 調査参加者（敬称略）
岡本嘉一・小田切絹江・小田切まさ子・鈴木きく江・乙黒きくゑ・小沢高恵・小沢千代子・小沢春代・岡本保枝・長島昌子・志村よし子・小沢久江・志村冴子・小沢みやの・山寺保子・小田切玲子・藤巻郁子・小林巧・古屋勝
4. 調査協力 韮崎市圃場整備室
5. 事務局 韮崎市教育委員会社会教育課
教育長 功刀幸丸、課長 雨宮高、係長 真壁静夫、秋山繁・野沢可祝

目 次

序 文
例 言
目 次
挿図・表目次
写真図版目次

I	調査に至る経緯と概要	1
II	遺跡の立地と環境	1
	1. 遺跡の立地	
	2. 周辺の遺跡	
III	遺跡の地相概観	2
IV	遺構と遺物	5
V	前田遺跡出土炭化材同定	37
VI	ま と め	41

写真図版

挿 図 ・ 表 目 次

第 1 図 前田遺跡①と周辺遺跡 …………… 3	第 21 図 7 号住居址 …………… 23
第 2 図 前田遺跡位置図 …………… 4	第 22 図 7 号住居址出土遺物 …………… 24
第 3 図 1 号住居址 …………… 5	第 23 図 8 号住居址 …………… 25
第 4 図 1 号住居址出土遺物 …………… 6	第 24 図 8 号住居址出土遺物 …………… 26
第 5 図 2 号住居址 …………… 7	第 25 図 9 号住居址・カマド …………… 28
第 6 図 2 号住居址出土遺物 …………… 8	第 26 図 9 号住居址出土遺物 …………… 29
第 7 図 2 号住居址出土遺物 …………… 9	第 27 図 10号住居址 …………… 30
第 8 図 3 号住居址・カマド …………… 9	第 28 図 10号住居址出土遺物 …………… 30
第 9 図 3 号住居址出土遺物 …………… 11	第 29 図 11号住居址 …………… 31
第 10 図 3 号住居址出土遺物 …………… 12	第 30 図 11号住居址出土遺物 …………… 31
第 11 図 4 号住居址 …………… 12	第 31 図 12号住居址 …………… 32
第 12 図 4 号住居址出土遺物 …………… 13	第 32 図 12号住居址出土遺物 …………… 33
第 13 図 5 号住居址 …………… 14	第 33 図 前田遺跡全体図 …………… 34
第 14 図 5 号住居址・カマド …………… 15	第 34 図 遺構外出土遺物 …………… 36
第 15 図 5 号住居址出土遺物 …………… 17	第 35 図 5 号住居址出土炭化材試料図… 40
第 16 図 5 号住居址出土遺物 …………… 18	表 1 前田遺跡 5 号住居址 出土炭化材の樹種 …………… 39
第 17 図 5 号住居址出土遺物 …………… 19	図表 1 …………… 42・43
第 18 図 6 号住居址・カマド …………… 20	図表 2 …………… 44・45
第 19 図 6 号住居址出土遺物 …………… 21	図表 3 …………… 46・47
第 20 図 6 号住居址出土遺物 …………… 22	図表 4 …………… 48・49

写真図版目次

- 図版 1 前田遺跡遠景・遺跡発掘風景
- 図版 2 1号住居址・2号住居址
- 図版 3 3号住居址・4号住居址
- 図版 4 5号住居址・5号住居址カマド
- 図版 5 5号住居址鉄器出土状態
- 図版 6 6・7号住居址・6号住居址
- 図版 7 6号住居址・6号住居址遺物出土状態・6号住居址カマド
- 図版 8 7号住居址・8号住居址
- 図版 9 7号住居址遺物出土・9号住居址カマド・9号住居址
- 図版 10 10号住居址・11号住居址
- 図版 11 測量風景・12号住居址
- 図版 12 1・2・3号住居址出土遺物
- 図版 13 5号住居址出土遺物
- 図版 14 4・6・7・8号住居址出土遺物
- 図版 15 9・11・12号住居址・遺構外出土遺物
- 図版 16 5号住居址出土炭化材顕微鏡写真
- 図版 17 5号住居址出土炭化材顕微鏡写真
- 図版 18 5号住居址炭化材出土状況

I 調査に至る経緯と概要

昭和62年度県営圃場整備事業実施にともない、本市教育委員会では韭崎市圃場整備室から依頼を受け、事業予定地区を昭和61年度に試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、峡北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課・市教育委員会で協議を行い、前田遺跡について、圃場整備事業に先立って、延面積約4,000㎡を対象として発掘調査を行い、記録に留め、永く後世に伝えることにした。

発掘調査は、昭和62年5月下旬から開始し、約3ヶ月間行った。引き続き、遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは、昭和63年3月であった。

II 遺跡の立地と環境（第1図）

1 遺跡の立地

前田遺跡は、山梨県韭崎市中田町中条字前田地内に所在した。

韭崎市は山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的に略山・台地・平地の3地域に分けられる。塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓西端の断崖と、七里岩台地の東側の片山とにはさまれた低地性平地で、通称藤井平と呼ばれ、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯となっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、韭崎等ノ数村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、たび重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、前田遺跡は標高約404mの水田下に発見された。

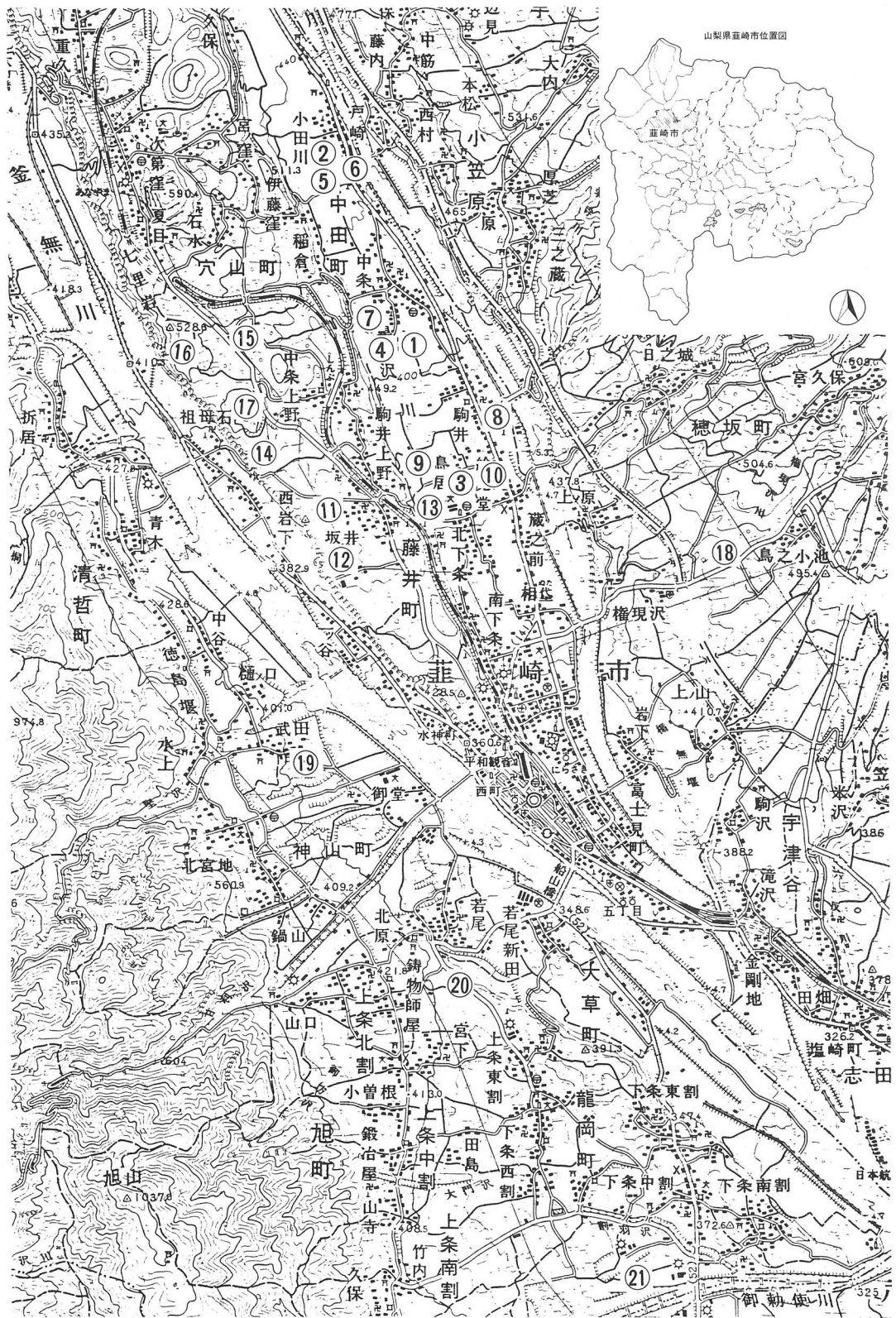
2 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	前田	平安	昭和62年度 韭崎市教育委員会調査
②	中本田	縄文	昭和61年度 韭崎市教育委員会調査
③	堂の前	弥生・奈良・平安	昭和61年度 韭崎市教育委員会調査
④	金山	中世～近世	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査
⑤	中道	縄文晩期・平安	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査
⑥	下木戸	平安	

番号	遺跡名	時代区分	備考
7	中田小学校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 葦崎市教育委員会調査
8	駒井	平安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
9	坂井1	縄文	
10	宮の前	縄文・平安	
11	坂井2	縄文前期～晩期	志村滝蔵『坂井』 地方書院、昭和40年
12	坂井南	古墳前期・平安	昭和60年度 葦崎市教育委員会第三次調査
13	後田	縄文・弥生	
14	天神前	縄文	
15	中条上野1	縄文	
16	中条上野2	縄文	
17	新府城跡	中世	国指定史跡
18	女夫石	縄文	
19	武田信義館跡	中世	
20	久保屋敷	古墳前期	昭和58年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
21	将棋頭		昭和62年 葦崎市教育委員会調査

Ⅲ 遺跡の地相概観

前田遺跡は、中田小学校から400 m程南側の、日当たりの良い微高地で、北側には集落が形成され、南は藤井小学校まで水田が広がっている。遺跡の西側は道を挟んで、昭和60年度に発掘調査された金山遺跡があった所で、今は圃場整備された水田となっている。東側は平坦に見えるが、緩傾斜の地となっている。調査区北端において、土層を観察すると、上位から下位に、耕作土・水田床土・暗褐色土・暗黄褐色土の順に堆積がみられる。遺構は、暗黄褐色土層中に掘り込まれていた。



第1図 前田遺跡①と周辺遺跡 (1:50,000)



第2図 前田遺跡位置図 (1:3,000)

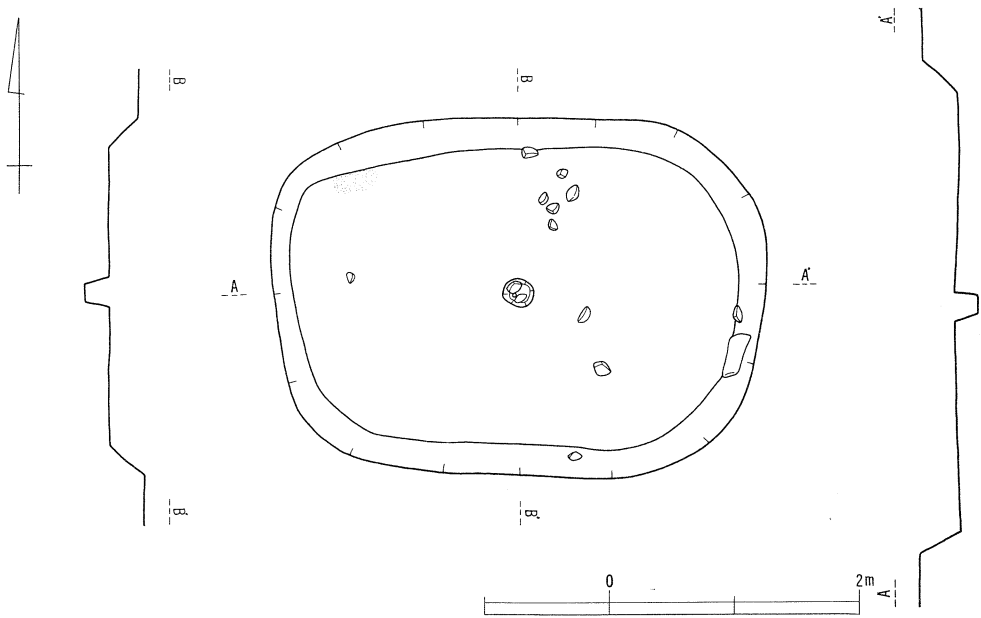
Ⅳ 遺構と遺物

調査の結果、竪穴式住居址12軒が発見された。以下、調査中に付けた住居址番号順に遺構と遺物についてみていこう。

<1号住居址> (第3・4図)

【遺構】

調査区北部に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は、東西約3.9m、南北約2.8mを測り、平面形は隅円長方形の小判形を呈する。壁高は30cm前後を測る。床面は平坦である。柱穴・周溝はないが、中央部に直径約24cmの楕円形で、床面からの深さ約30cmの穴が検出された。カマドそのものはないが、床面北西側の壁に沿ったところに焼土があった。



第3図 1号住居址 (1/30)

【遺物】

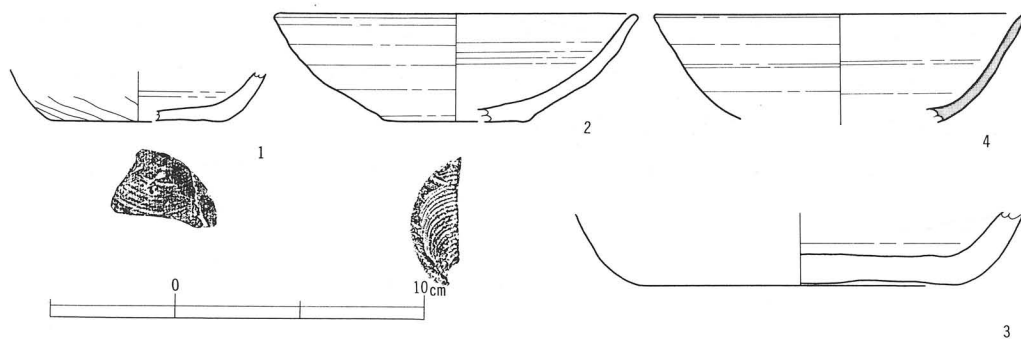
遺物の出土は極めて少ないが、土師器坏・甕・灰釉陶器が破片で出土した。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	—, —, 7.0	密	赤褐色	外面体部下半ヘラ削り 底部、回転糸切り後、外周ヘラ 削り 底部版片
2	土師器	坏	4.3, 14.6, 6.0	金雲母を多 量に含む	黄褐色、一 部黒を含む 黒 褐 色	底部、回転糸切り痕あり 2/3欠損

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
3	土師器	甕	- , - , 13.4		砂粒を含む	淡黄褐色 黄灰色一部淡 黄褐色	削りと撫で整形 底部破片
4	灰陶 釉器	碗	- , 15.0 , -		精 製	白灰色	ロクロ水挽き 釉はつけかけ 破片



第4図 1号住居址出土遺物 (1/3)

<2号住居址> (第5・6・7図)

【遺 構】

調査区北東部に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は、東西約 3.7 m、南北 4.2 m を測り、平面形は隅円方形を呈する。壁はやや外傾し、良好な立ち上がりを見せるが、南側は3号住居址に切られており、遺存部分はわずかである。壁高は、低い所で 10 cm 前後、高い所で 40 cm 前後を測る。床面は暗褐色土で、平坦である。柱穴・周溝はない。カマドはなかったが、北西隅に焼土の散在がみられた。

【遺 物】

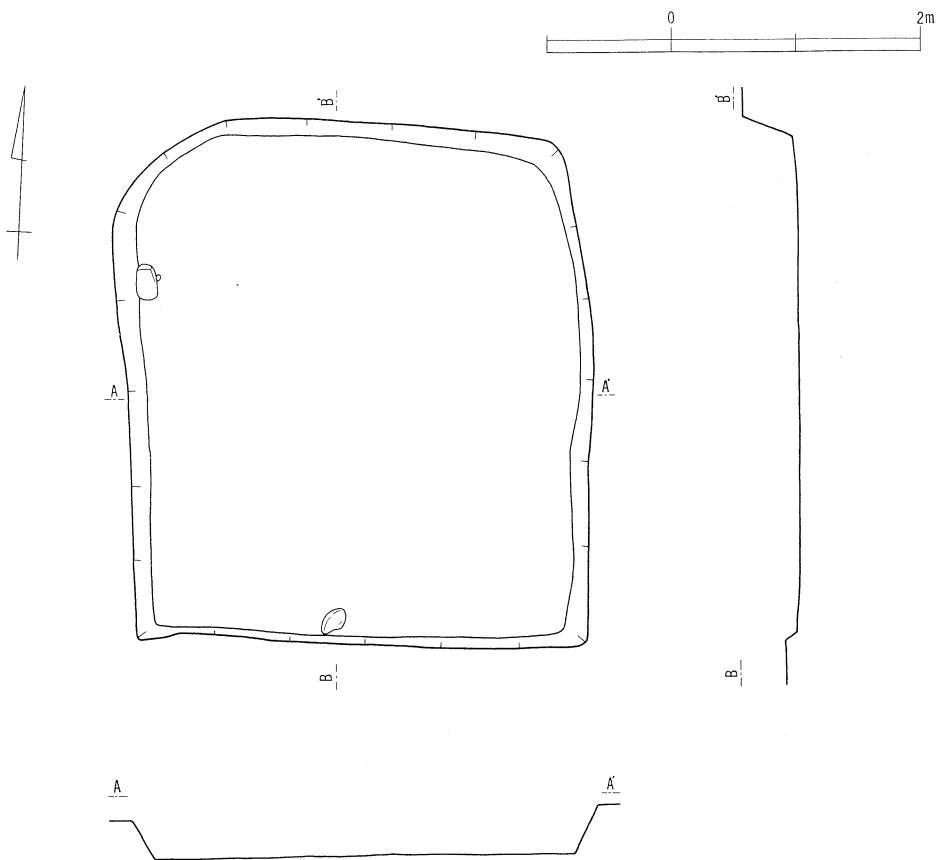
出土遺物は少ないが、住居址の中央部に集中して甕などが出土している。中には墨書が施される土師器坏や、鉄製品も何点かみられた。

出土遺物一覧

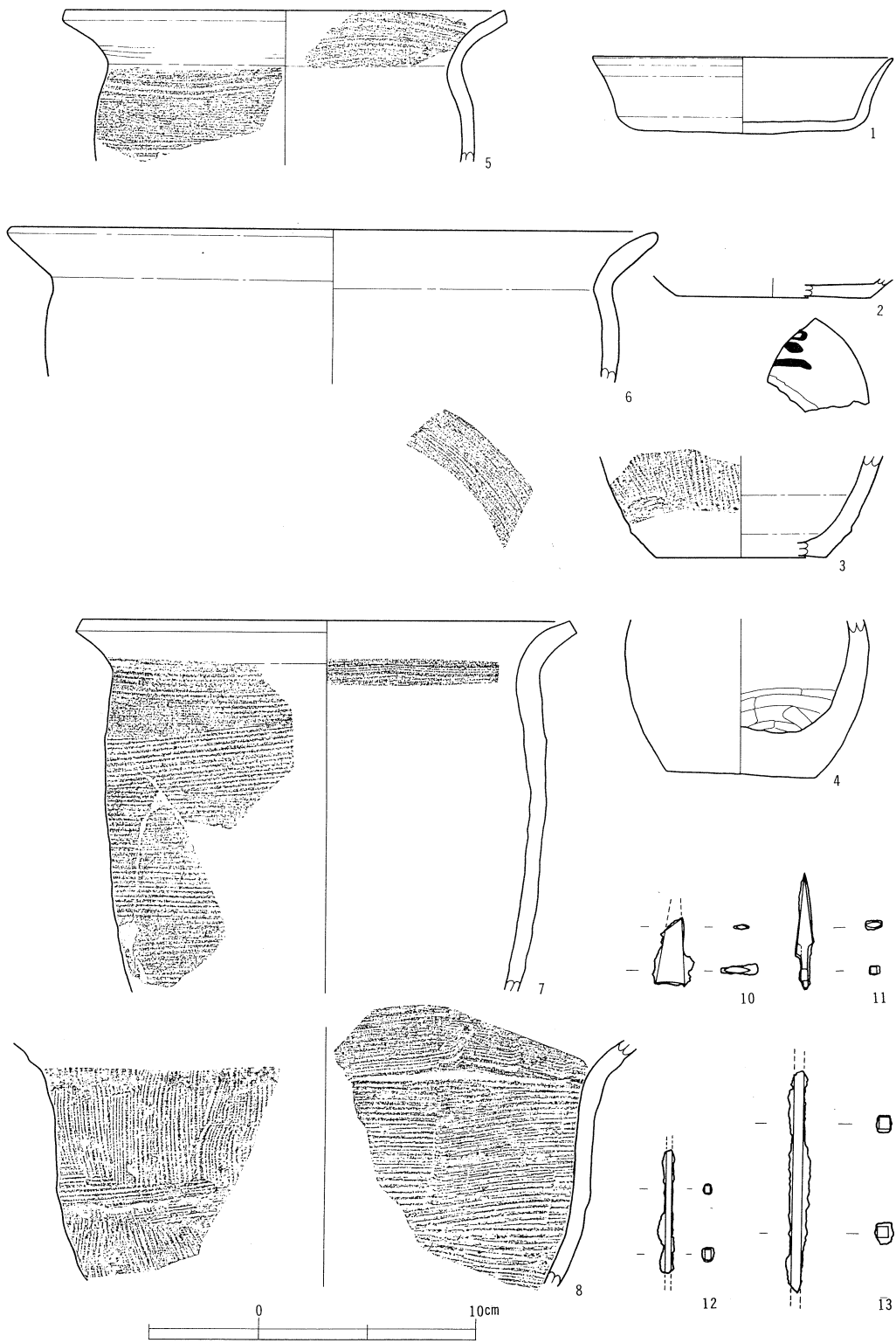
(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	坏	3.5, 13.8, 9.7		精 製 褐色粒子を 含む	黄 褐 色	底部へラ削り 1/2 欠損
2	土師器	坏	- , - , 8.9		砂粒を含む	"	底部に墨書あり 破片
3	土師器	甕	- , - , 7.9		やや粗い 砂粒を含む	黒 色 黒 褐 色	外面、胴部、縦ハケ整形 底部破片
4	土師器	甕	- , - , 6.8		砂粒を含む	赤 褐 色 黄 灰 褐 色	内面、撫でつけ痕あり 底部破片
5	土師器	甕	- , 22.0 , -		砂粒を含む	茶 褐 色	口縁部～外面は撫でられ、カキメ 状の条痕がみられる。口縁部破片

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
6	土師器	甕	-	30.0, -	砂粒を含む	淡白黄褐色	口縁部横撫で 外面、胴部、縦ヘラ削り 口縁部破片
7	土師器	甕	-	19.5, -	やや粗い 砂粒、白色 粒子を含む	茶 褐 色 黄 赤 褐 色	外面、横ハケ整形、口縁部横撫で 内面、横撫で 胴部下半欠損
8	土師器	甕	-	- , -	やや粗い 砂粒を含む	黄 赤 褐 色 茶 褐 色	外面、縦ハケ整形、粘土のつなぎ 目に横位のハケ目あり。 内面、横ハケ整形 破片
9	土師器	甕	-	3.1, -	やや粗い 砂粒を含む	暗茶褐色 淡 褐 色	外面、上半横位、下半縦位ハケ目 内面、上半横位ハケ目 胴部破片
10	鉄 器	刀子					
11	鉄 器	鉄鏃					
12	鉄 器	不明					
13	鉄 器	不明					

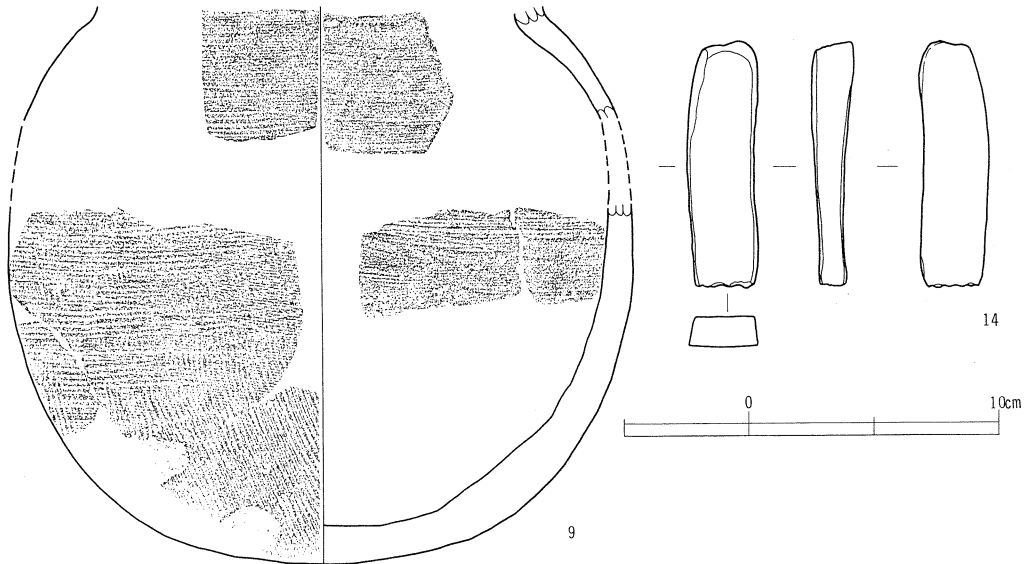


第5図 2号住居址 (1/60)



第6图 2号住居址出土遺物(1/3)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
14	石 器	砥石					全面にわたり使用痕あり

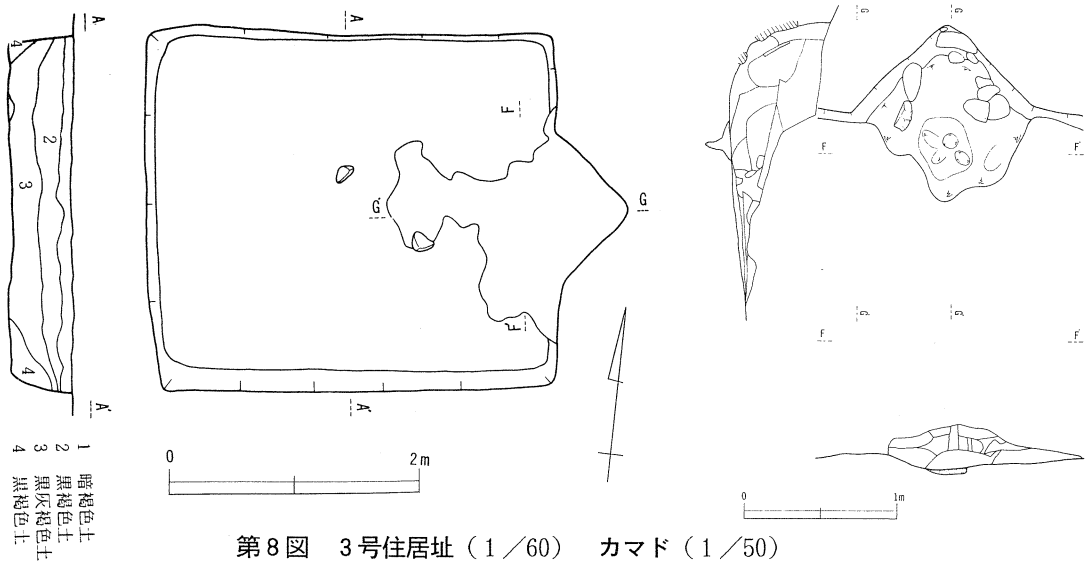


第7図 2号住居址出土遺物 (1/4)

<3号住居址> (第8・9・10図)

【遺 構】

調査区北西部に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は、東西約3.2m、南北約2.8mを測る。平面図は略方形を呈する。壁は良好な立ち上がりをみせ、高さは50cm前後を測る。小型の深い竪穴となっている。床面は堅く平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは、東壁中央に構築される。規模は長さ約1.8m、幅約1.2m。袖部に石を使い、粘



第8図 3号住居址 (1/60) カマド (1/50)

土をもってつくられたものと思われるが、土の堆積状況はグシャグシャで遺存状態は悪かった。燃焼部は床面より若干窪み、厚さ約 17 cm で焼土が確認された。

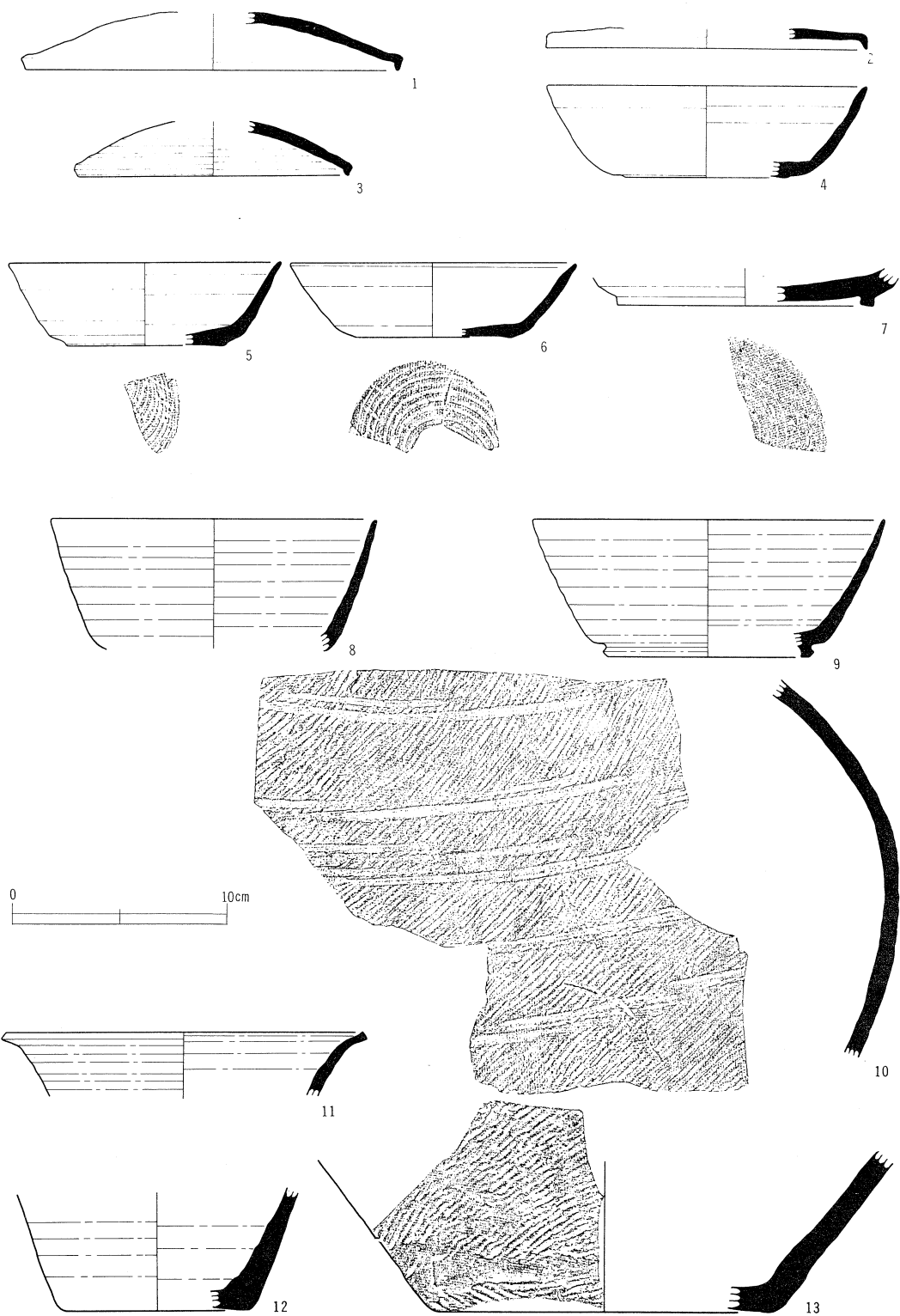
【遺物】

カマド周辺の粘土・焼土等が散在中から、須恵器が主体に出土している。甕類は叩目が施されている。出土遺物のほとんどが破片ではあるが、蓋・坏・甕類の良好な資料が得られたので、何点かを図示した。

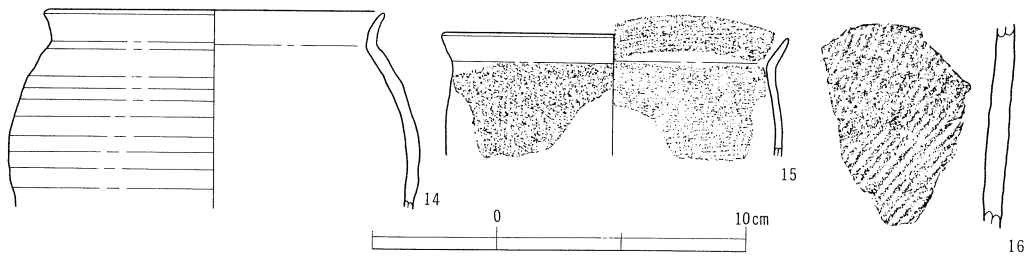
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径		(外面 内面)	
1	須恵器	蓋	—, 17.4, —	粗い砂粒を含む	暗灰色 白黄灰色	外面、上半回転ヘラ削り 1/3欠損
2	須恵器	蓋	—, 15.0, —	白色粒子を含む	黄白灰色 暗灰色	破片
3	須恵器	蓋	—, 12.6, —	白色粒子を含む	灰色	外面、上半回転ヘラ削り 破片
4	須恵器	坏	4.3, 15.0, 7.6	精製	白灰色	破片
5	須恵器	坏	3.9, 12.7, 7.4	白色粒子を含む	灰色	底部回転糸切り痕 破片
6	須恵器	坏	3.5, 13.4, 7.0	白色粒子粗い砂粒を少量含む	青灰色	底部回転糸切り痕 破片
7	須恵器	坏	—, —, 12.0	白色粒子を含む	灰褐色 白灰色	付高台 底部回転削り整形 底部破片
8	須恵器	坏	—, 15.2, —	粗い砂粒を含む	暗灰色 灰色	破片
9	須恵器	坏	6.4, 16.4, 9.3	黒色、やや粗い白色粒子を含む	暗灰色 灰色	付高台 破片
10	須恵器	甕	—, —, —	白色粒子を含む	暗灰色	外面、叩目 横線が数段走る 胴部破片
11	須恵器	甕	—, 16.7, —	砂粒を含む	暗灰色	内面、降灰によりまだら状 口縁部破片
12	須恵器	甕	—, —, 8.6	白色粒子を含む	明灰色	破片
13	須恵器	甕	—, —, 15.6	白色粒子を含む	暗灰色 白灰色	外面、叩目 下端にヘラ削り 破片
14	土師器	小形鉢	—, 13.6, —	粗い、砂粒	褐色 暗褐色	ロクロ整形によるものか、 横方向の撫で痕がみられる。 破片
15	土師器	小形鉢	—, 13.8, —	金雲母を含む	褐色	外面、縦ハケ整形痕あり 内面、横ハケ 口縁部横撫で 破片
16	土師器	甕	—, —, —	金雲母白色粒子を含む	茶褐色	外面、叩目痕あり 破片



第9图 3号住居址出土遗物 (1/3)



第10図 3号住居址出土遺物 (1/3)

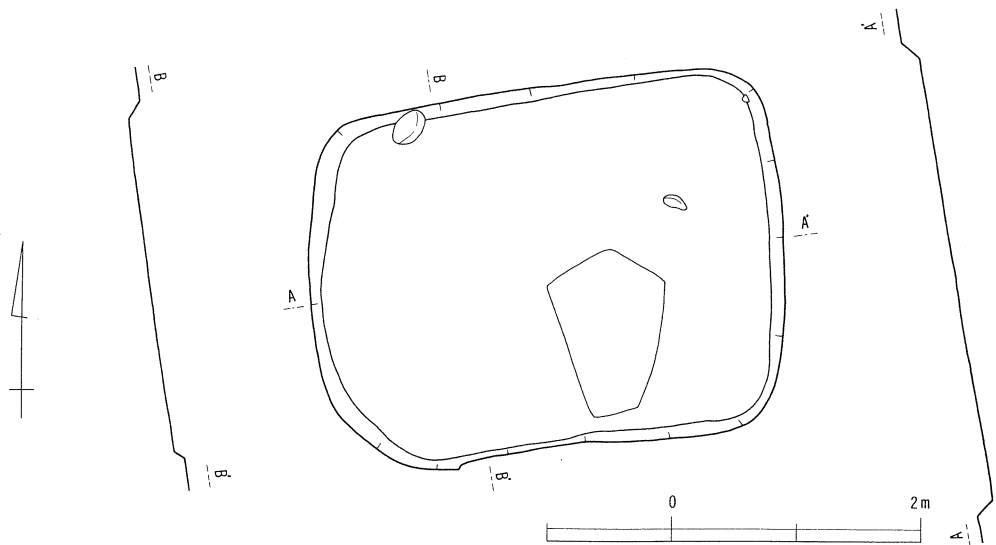
<4号住居址> (第11・12図)

【遺構】

調査区南部に位置する。規模は東西約3.7m、南北2.8m。平面形は隅円長方形を呈する。壁はやや外傾し、壁高は15cm前後を測る。6・7号住居址を切って構築される。平面は略平坦で、堅緻な部分は平面図中の不整五角形の内だけであった。柱穴・周溝・カマドはない。

【遺物】

遺物の出土は少ないが、須恵器類の破片が目立った。



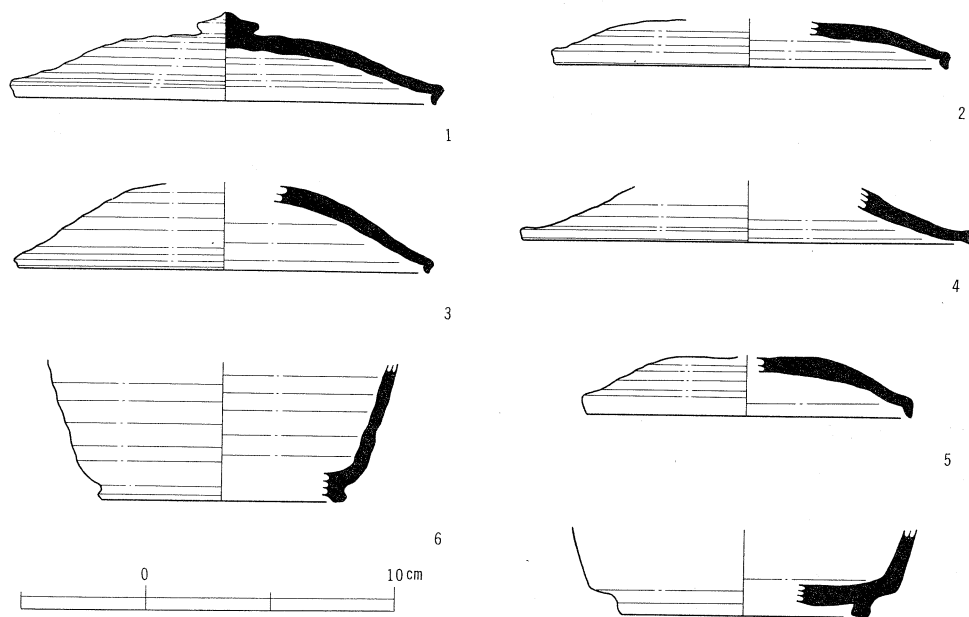
第11図 4号住居址 (1/60)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	3.6, 16.8, -	白色粒子を含む	淡灰色	外面、上半回転ヘラ削り 1/2欠損
2	須恵器	蓋	- , 15.7, -	白色粒子を含む	灰色	外面、上半回転ヘラ削り 破片
3	須恵器	蓋	- , 16.4, -	白色粒子を含む	青灰色	外面、上半回転ヘラ削り 3/4欠損

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
4	須恵器	蓋	-, 18.0, -	白色粒子を含む	外縁、灰色 内側、褐色 系	ロクロ水挽き痕 3/4 欠損
5	須恵器	蓋	-, 13.1, -	白色粒子を含む	白 灰 色 一部青灰色	外面、上部回転ヘラ削り 3/4 欠損
6	須恵器	坏	-, -, 9.6	白色粒子を含む	灰 褐 色	ロクロ水挽き 付高台 破片
7	須恵器	坏	-, -, 9.9	精 製	赤 灰 色 灰 色	付高台 破片



第12図 4号住居址出土遺物 (1/3)

<5号住居址> (第13・14・15・16・17図)

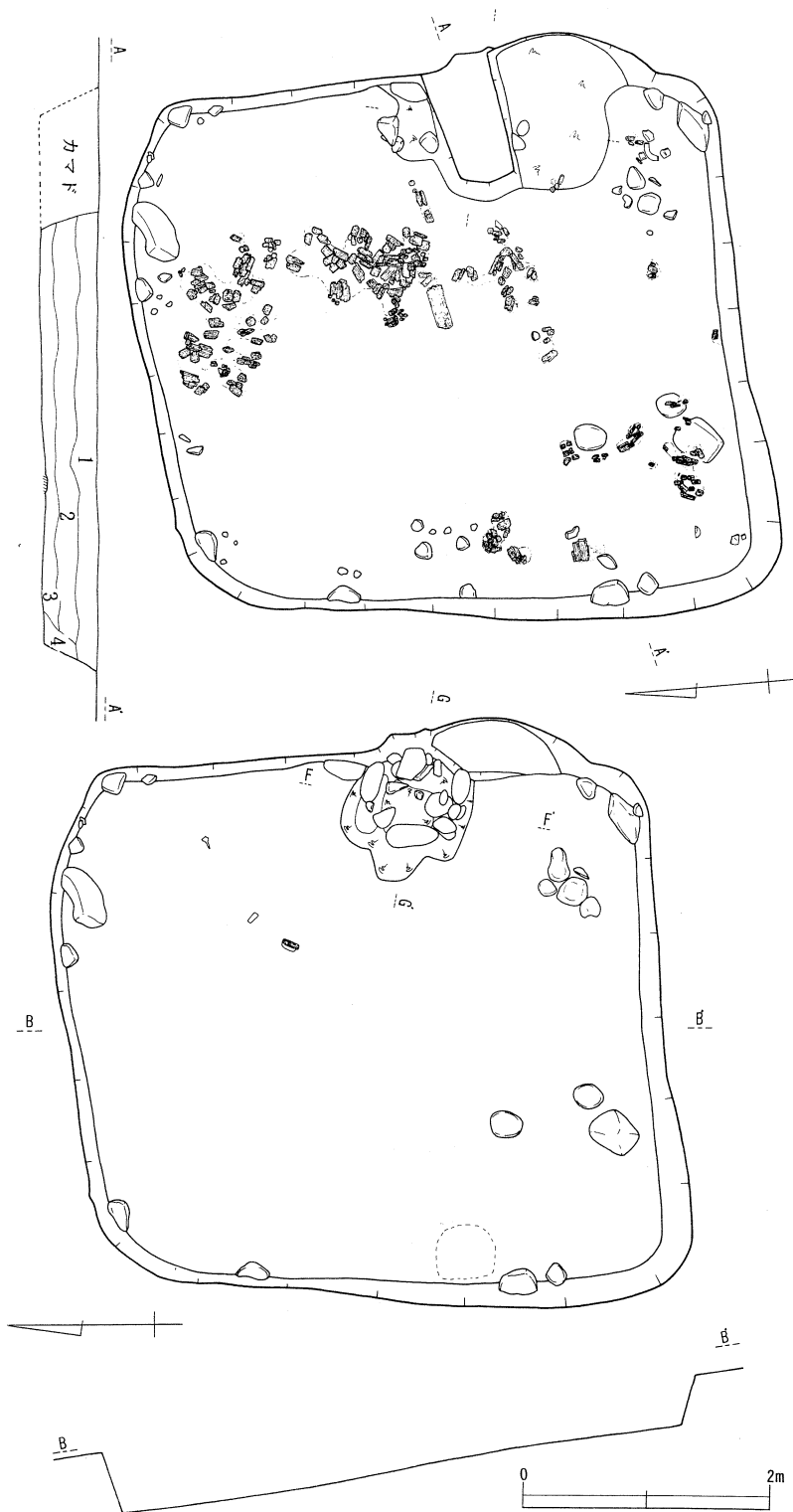
【遺 構】

調査区南端東側に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。土中に炭化物が多くみられ、土層観察用土手を残し掘り下げていった所、炭化材・土器片等が出土し床面が検出された。埋没土は暗褐色土と黒褐色土に大別される。規模は東西約4.2m、南北約4.7mを測り、平面形は若干ゆがんだ隅円長方形を呈する。壁はやや外傾し、良好な立ち上がりを見せる。壁高は50cm前後を測り、比較的深い堅穴となっている。床面は暗黄褐色土系で、堅く平坦であった。柱穴・周溝はない。西壁際中央からやや南に寄った所に、一辺約45cmの不整隅円方形の範囲(挿図中破線内)で特に土が堅くしまっている部分があり、入口部施設に係わるものかとも思われる。カマドは長さ1.2m、幅1mで、東壁に構築され、袖部には比較的偏平な石を立て、全体を粘土で覆うつくり方がなされる。燃焼部は床面より若干窪み、焼土は直径約

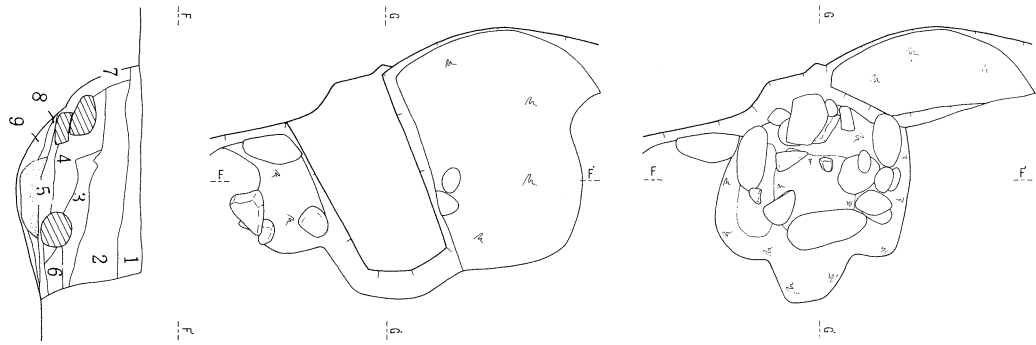
60 cmの範囲に厚さ約12 cmの厚さに形成されていた。

【遺物】

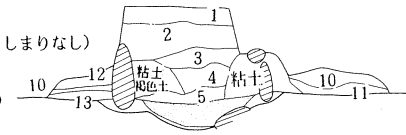
炭化材は、各壁から竪穴の中央へむかうように遺存しているのとれるが、埋没土中への散在も激しく、大きな形状をとどめるものが少なく正確な方向はわからない。土器は、土師器類を主体に比較的良好に出土した。大まかな出土地域は、坏類が南西隅、皿類がカマドの南側の南東隅と片寄りがみられる。また、鉄製品の出土も多く、カマドから北西方向の所に比較的まとまって出土した。これらの遺物は、床面直上乃至15 cm程浮上して出土しており、いずれも本住居址にともなうものにとらえられよう。



第13図 5号住居址 (1/60)



- 1 暗褐色土 (含鉄分)
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 (炭化物散在)
- 4 黒褐色土 (焼土粒を含む)
- 5 暗黒褐色土
- 6 黒褐色土 (焼土・炭混入)
- 7 黒褐色土 (焼土・炭混入)
- 8 火熱を受けた土
- 9 砂質褐色土
- 10 暗褐色土 (含 若干の粘土)
- 11 黒褐色土 (炭を多く混入)
- 12 火熱を受けた粘土
- 13 暗褐色土 (炭を混入)



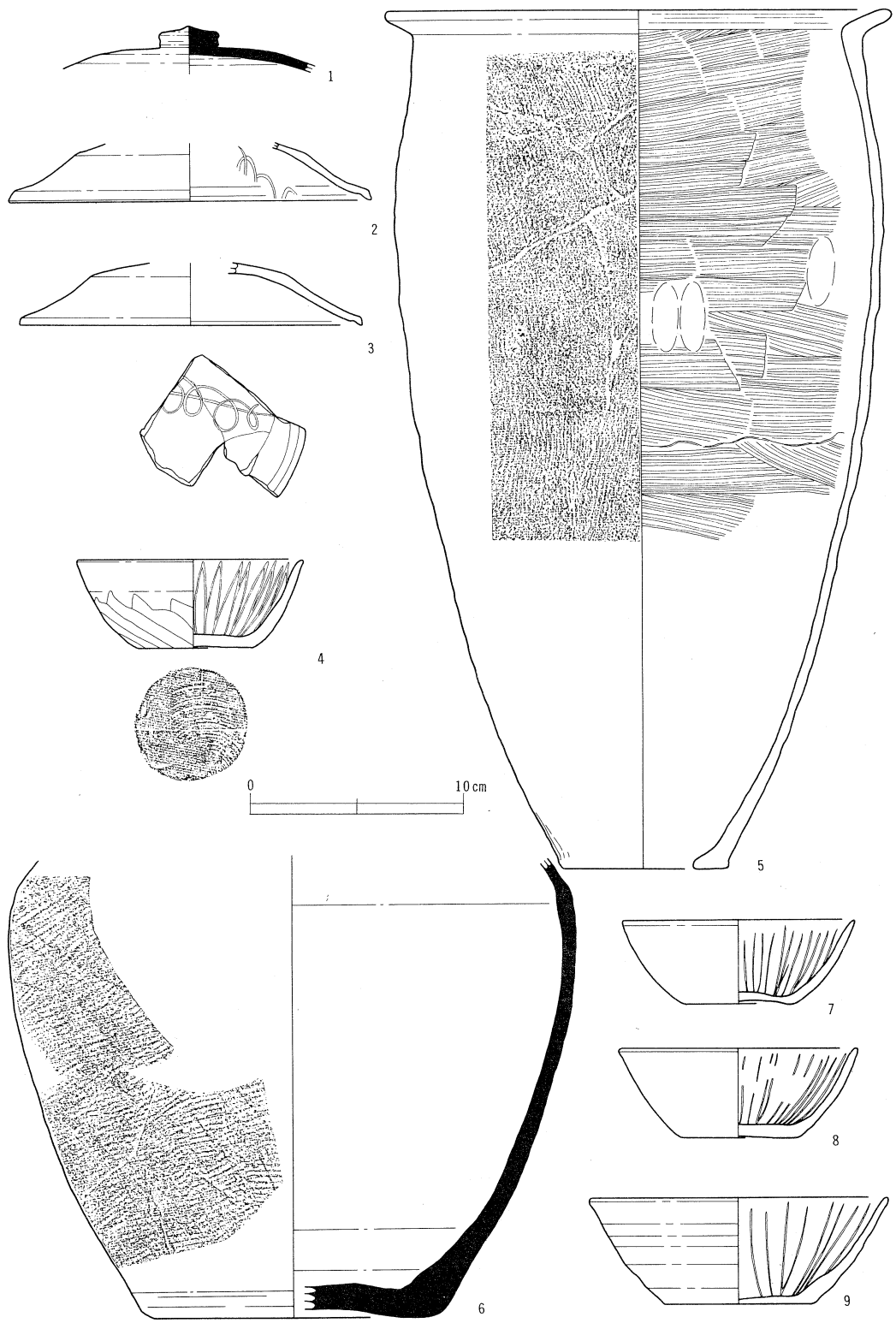
第14図 5号住居址カマド (1/40)

出土遺物一覧

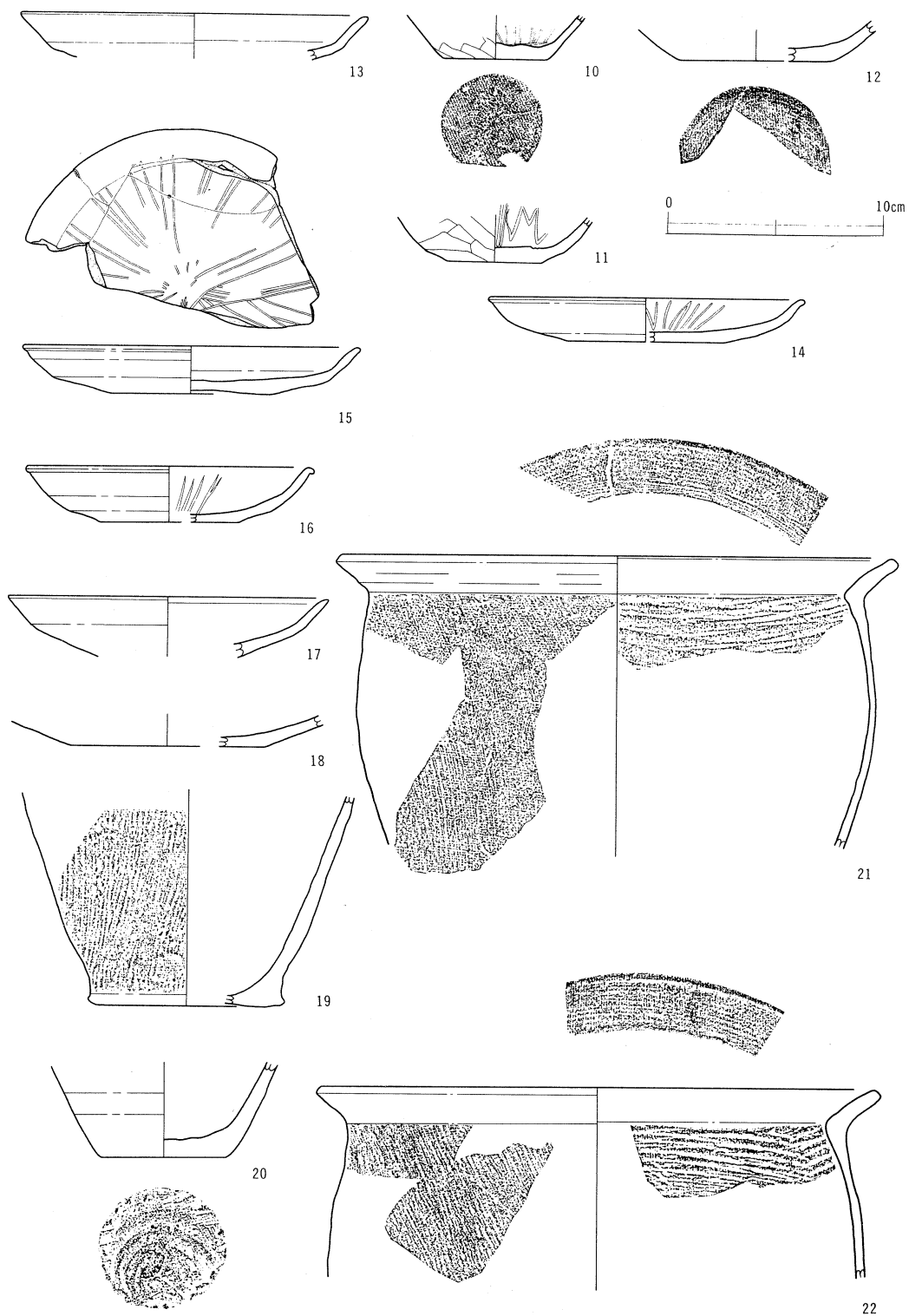
(単位: cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	—, —, —	白色粒子を含む	青灰色	外面、上半回転ヘラ削り 破片
2	土師器	蓋	—, 16.8, —	粗い砂粒を含む	黄灰褐色 黄褐色	外面、上半回転ヘラ削り 破片
3	土師器	蓋	—, 16.0, —	赤色砂粒を含む	黒茶褐色 黒褐色	外面、上半回転ヘラ削り 内面、螺旋状暗文 破片
4	土師器	坏	4.2, 10.5, 5.4	白色砂粒子を含む	黄褐色	外面、体部下半ヘラ削り 底部切り離し後外周ヘラ削り(雑) 内面、花卉状暗文 口縁部一部破損
5	土師器	甕	40.2, 23.8, 7.6	砂粒・金雲母を含む	茶褐色	外面、胴部縦ハケ目 内面、胴部横ハケ目、圧痕あり 口縁部内側ハケ目 底部、穴あく、甕か? 2/3欠損
6	須恵器	甕	—, —, 13.0	白色粒子・砂粒を含む	暗灰色	外面、胴部叩目、下端にヘラ削りがめぐる 3/4欠損
7	土師器	坏	3.9, 10.8, 4.8	精製	暗茶褐色	外面、体部下端にヘラ削りが施されるが磨滅により明瞭ではない 内面、放射状暗文 1/3欠損
8	土師器	坏	4.2, 11.0, 5.2	赤色砂粒を含む	暗茶褐色	外面、体部下半~底部磨滅により整形不明瞭 内面、放射状暗文 口縁部一部破損
9	土師器	坏	5.0, 14.0, 7.0	粗い砂粒を少量含む	赤褐色 黄褐色	外面、ロクロ水挽き痕 内面、放射状暗文 3/4欠損
10	土師器	坏	—, —, 4.8	微砂粒を含む	褪褐色	外面、体部下端ヘラ削り 内面、暗文 底部、回転糸切り離し後外周ヘラ削り 底部破片
11	土師器	坏	—, —, 4.3	白色粒子を含む	黄褐色	外面、体部下半~底部ヘラ削り 内面、暗文 底部破片
12	土師器	坏	—, —, 7.0	白色粒子を含む	暗黄褐色 黒色	底部、回転糸切り 内面、黒色土器 底部破片

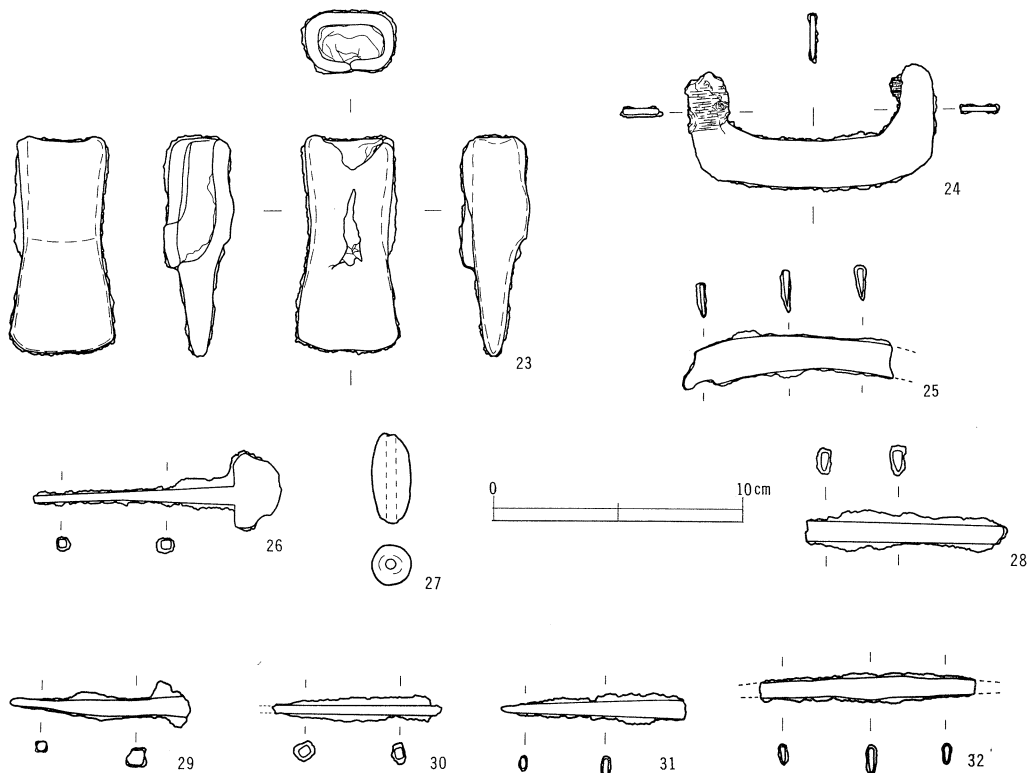
番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他	
			器高・口径・底径					
13	土師器	皿	-	16.0, -	微砂粒 赤褐色粒を 含む	褪 褐 色	磨滅により器面はザラつく 破片	
14	土師器	皿	2.1, 14.4, 7.2		砂粒 赤褐色粒を 含む	黒 黄 褐 色 暗 褐 色	外面、体部下端～底部回転 ヘラ削り 内面、暗文 4/5 欠損	
15	土師器	皿	2.3, 15.4, 7.2		微砂粒を含 む	茶 褐 色 黄 灰 褐 色	外面、体部下半～底部回転 ヘラ削り 内面、暗文 2/3 欠損	
16	土師器	皿	2.5, 12.8, 6.4		砂粒を含む	茶 褐 色	外面、体部下半～底部回転 ヘラ削り 内面、暗文 破片	
17	土師器	皿	-	14.8, -	微砂粒 赤色砂粒を 含む	赤 茶 褐 色 茶 褐 色	磨滅により器面はザラつく 破片	
18	土師器	皿	-	-	9.0	砂粒を含む	茶 褐 色 黄 褐 色	外面、体部下半～底部回転 ヘラ削り 破片
19	土師器	甕	-	-	9.0	砂粒を含む	暗 茶 褐 色	外面、たて方向ハケ目 内面、横方向ハケ目 押圧痕あり 破片
20	土師器	甕	-	-	5.8	砂粒を含む	茶 褐 色	底部、棒状工具による切り 離し? 破片
21	土師器	甕	-	25.4, -	砂粒・金雲 母を含む	暗 褐 色	外面、胴部縦ハケ目 内面、胴部横粗いハケ目 口縁部内側ハケ目 口縁部～胴部破片	
22	土師器	甕	-	25.6, -	砂粒・金雲 母を含む	茶 褐 色	外面、胴部縦ハケ目 内面、胴部横ハケ目 口縁部内側ハケ目 口縁部～胴部破片	
23	鉄 器	鉄斧						
24	鉄 器	?						
25	鉄 器	鎌						
26	鉄 器	不明						
27	土 鐘	不明						
28	鉄製品	不明						
29	鉄製品	不明						
30	鉄製品	不明						
31	鉄製品	不明						
32	鉄製品	不明						



第15图 5号住居址出土遺物 (1/3)



第16图 5号住居址出土遺物 (1/3)



第17図 5号住居址出土遺物(1/3)

< 6号住居址 > (第18・19・20図)

【遺構】

調査区南部に位置する。4号住居址直下の土が焼土・炭化物等を含んでいたため、土層観察用土手を残し掘り下げ検出された住居址である。規模は東西約2.8m、南北約2.9mを測り、平面形は略方形を呈する。壁は直立気味に立ち上がるが、西壁から南半部壁は明瞭ではなかった。壁高は約50cmを測るが、南北部は7号住居址を切っており床面の比高差約15cmを測る。床面は堅く、平坦。柱穴・周溝はない。カマドは東壁に構築される。規模は長さ約1.4m、幅約90cmで、石組と粘土によってつくられるが、土の堆積は複雑。燃烧部焼土の厚さは約2cmに形成。

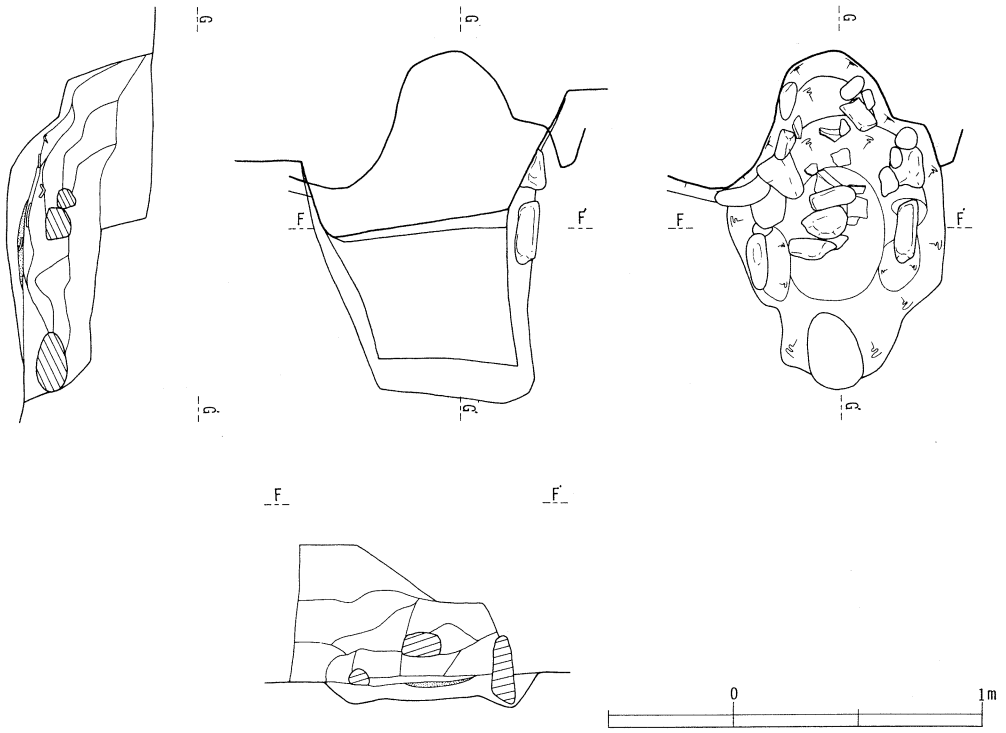
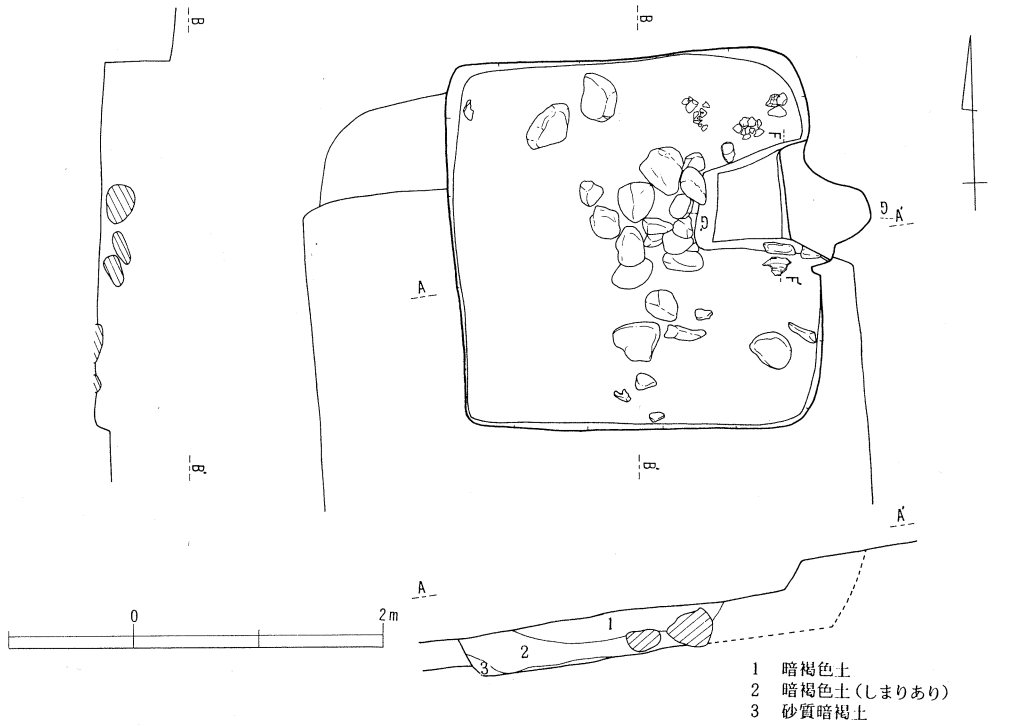
【遺物】

カマドの北に須恵器坏類、南に土師器甕類が出土している。

出土遺物一覧

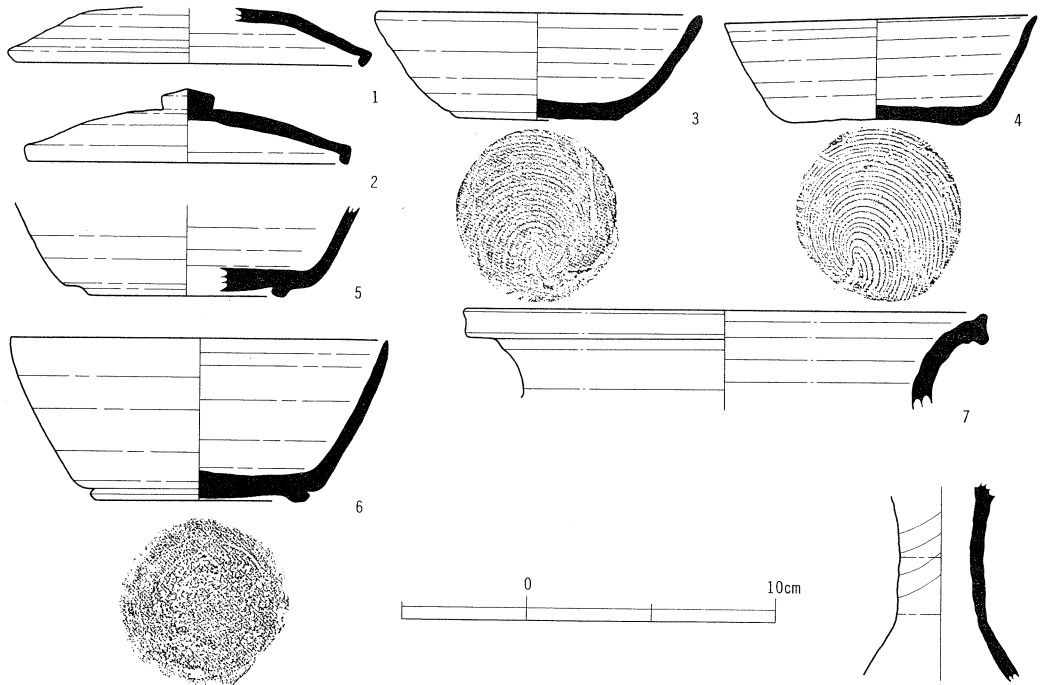
(単位: cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	蓋	-	13.9, -	白色粒子を含む	青灰色	外面、上半回転へら削り 4/5欠損
2	須恵器	蓋	2.9, 12.8, -		白色粒子を含む	灰色	外面、上部回転へら削り 1/2欠損

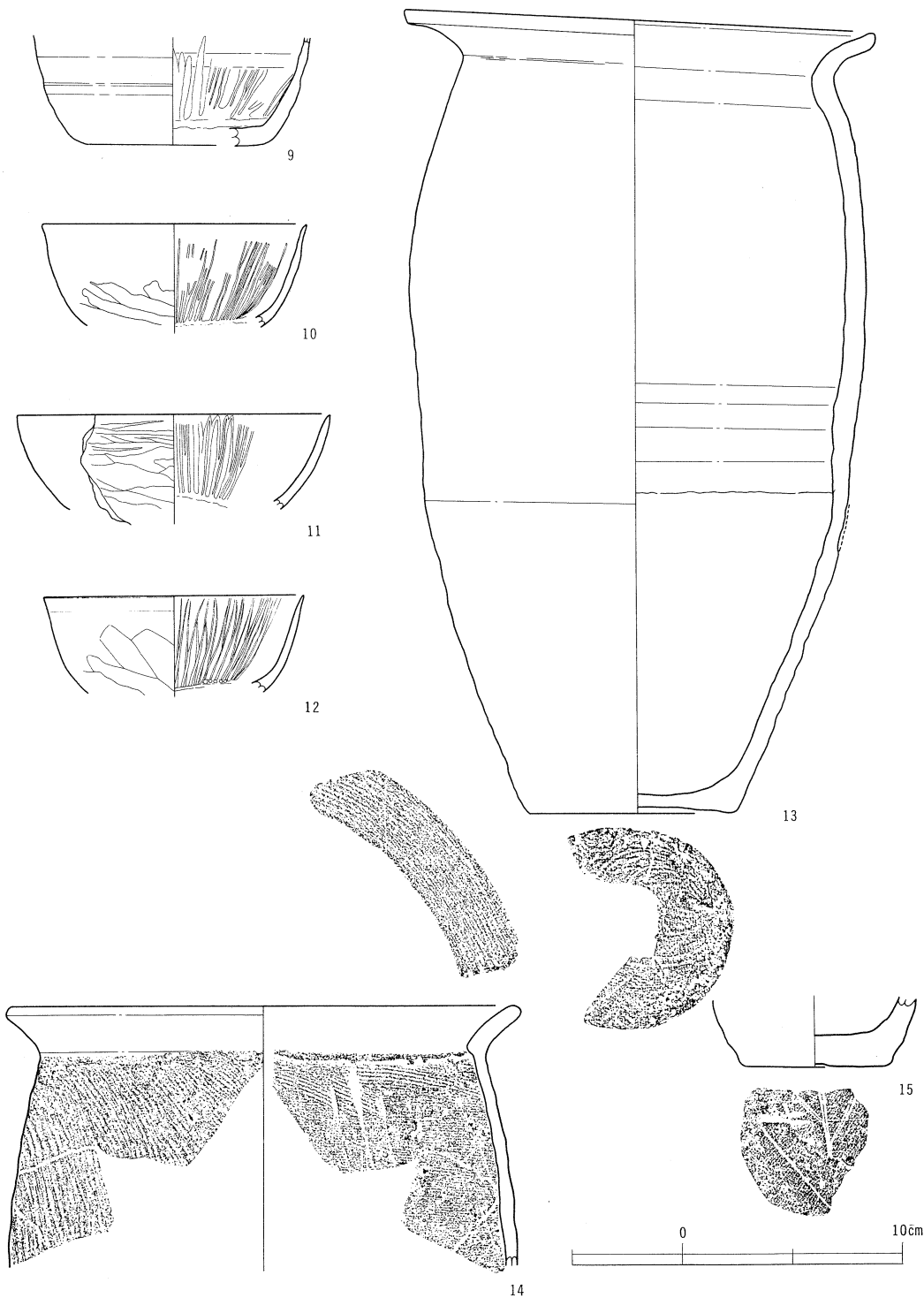


第18図 6号住居址(1/60)カマド(1/30)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
3	須恵器	坏	4.2, 13.1, 6.3	白色粒子を含む	灰 色	底部、回転糸切り痕 1/3 欠損
4	須恵器	坏	4.0, 12.5, 7.0	白色粒子を含む	茶 褐 色 暗 灰 色	底部、回転糸切り痕 口縁部欠損
5	須恵器	坏	—, —, 7.8	白色粒子を含む	灰 色	付高台 破片
6	須恵器	坏	6.5, 14.8, 8.6	白色粒子を含む	白 灰 色	器面磨滅によりザラつく 底部、回転糸切り離し後(?) 付高台 2/3 欠損
7	須恵器	甕	—, 20.8, —	白色粒子少量の赤褐色粒子を含む	黒 鉄 色 系	降灰による灰色まだらあり 口縁部破片
8	須恵器	高坏	—, —, —	白色粒子を含む	灰 色	口縁部破片
9	土師器	坏	—, —, 7.8	砂粒・金雲母を含む	赤 褐 色	内面、及びみこみ暗文あり 破片
10	土師器	坏	—, 12.0, —	砂粒赤褐色粒を含む	茶 褐 色	外面、体部下半へら削り 内面、暗文 破片
11	土師器	坏	—, 14.2, —	砂粒を含む	茶 褐 色	外面、体部下半へら削り、 上半へら磨き 内面、花卉状暗文あり 破片
12	土師器	坏	—, 11.9, —	砂粒を含む	茶 褐 色	外面、体部下半へら削り 内面、暗文 破片



第19図 6号住居址出土遺物 (1/3)



第20图 6号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
13	土師器	甕	36.0, 21.3, 9.3	微砂粒 白色粒子を 含む	黄 赤 褐 色	底部、回転糸切り痕ロクロ整形 (横撫で整形) 1/2欠損
14	土師器	甕	—, 23.0, —	金雲母を多 量に含む	茶 褐 色	外面、縦ハケ目 内面、横ハケ目 口縁部内側ハケ目 口縁部～ 胴部破片
15	土師器	甕	—, —, 6.4	金雲母・砂 粒を含む	褐 色	底部、木葉痕 底部破片

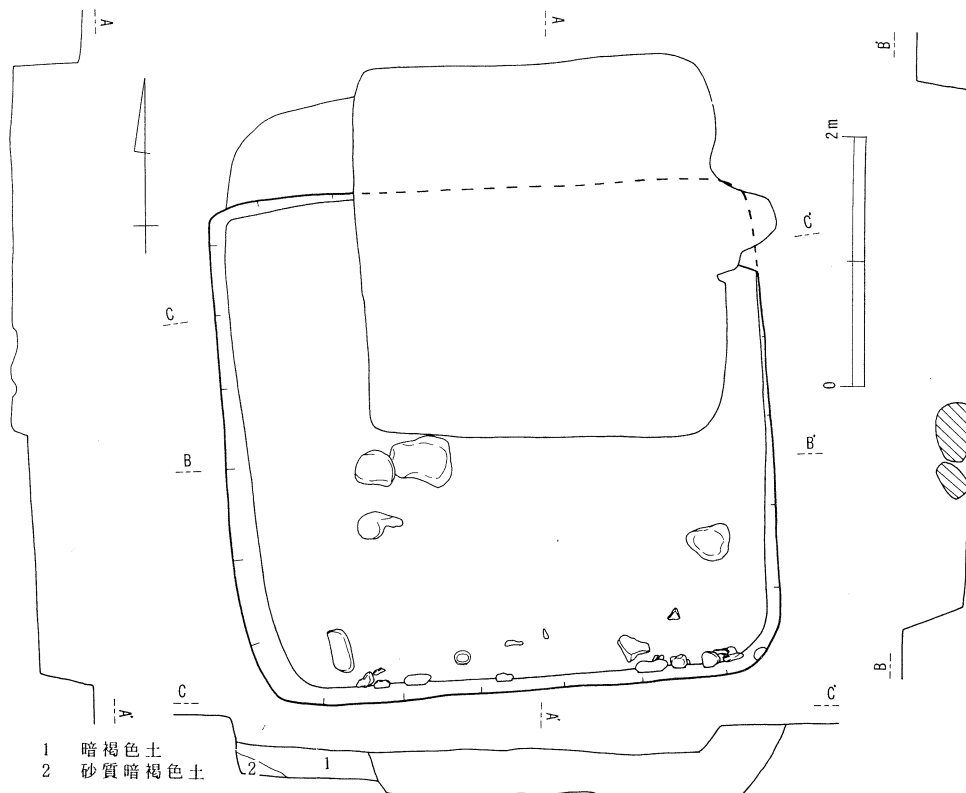
<7号住居址> (第21・22図)

【遺 構】

調査区南部に位置する。7号住居址の大半は、6号住居址に切られ遺存していない。4号住居址直下の埋没土を掘り下げ発掘する。規模は東西約4.3m、南北約4.1m、平面形は隅円方形と思われる。壁は遺存部で良好な立ち上りをみせ、壁高は40cm前後を測る。6号住居址との床面の比高差約60cm。床面は略平坦。柱穴・周溝はない。カマドはない。流れ込みによるものか、埋没土中に石が多く入り込んでいた。

【遺 物】

出土遺物は少ない。床面中央南端しに完形品の土師器甕が出土している。特殊な物として、鉄製の斧が出ている。

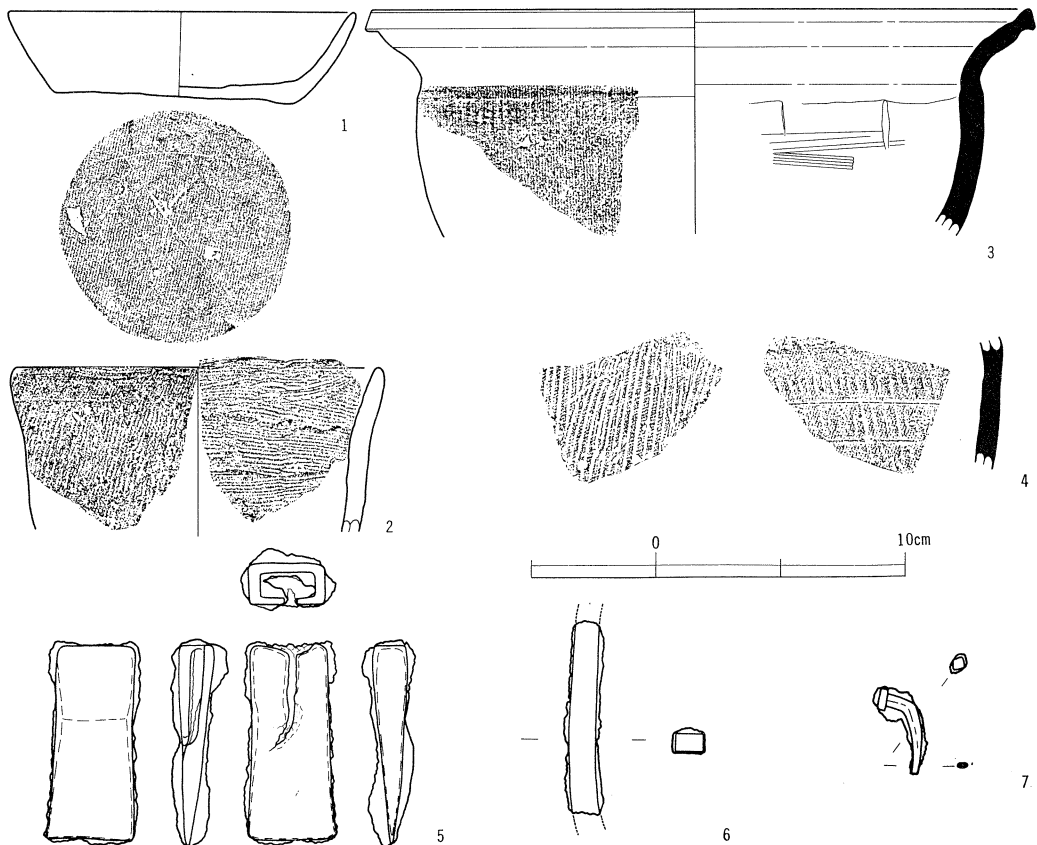


第21図 7号住居址 (1/30)

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	皿	3.4, 13.9, 9.3	褐色粒子を含む	褐色 色	底部、切り離し後、全面へら削り 底部に線刻あり 略完形
2		甕	-, 14.6, -	白色粒子を含む	黒 褐 色	外面、縦ハケ整形 内面、横ハケ整形 口縁部破片
3	須恵器	甕	-, 26.5, -	白色粒子を含む	灰 色	外面、叩目痕あり 内面、削りふうの撫で 口縁部破片
4	須恵器	甕	-, -, -	砂粒を含む	白 灰 色	外面、ハケ整形 内面、ハケ整形後横撫で 破片
5	鉄 器	鉄斧				有袋式無肩 長さ7.8cm 厚さ0.5cm 幅3.2cm
6	鉄 器	不明				
7	鉄 器	角釘				釣針状にわん曲

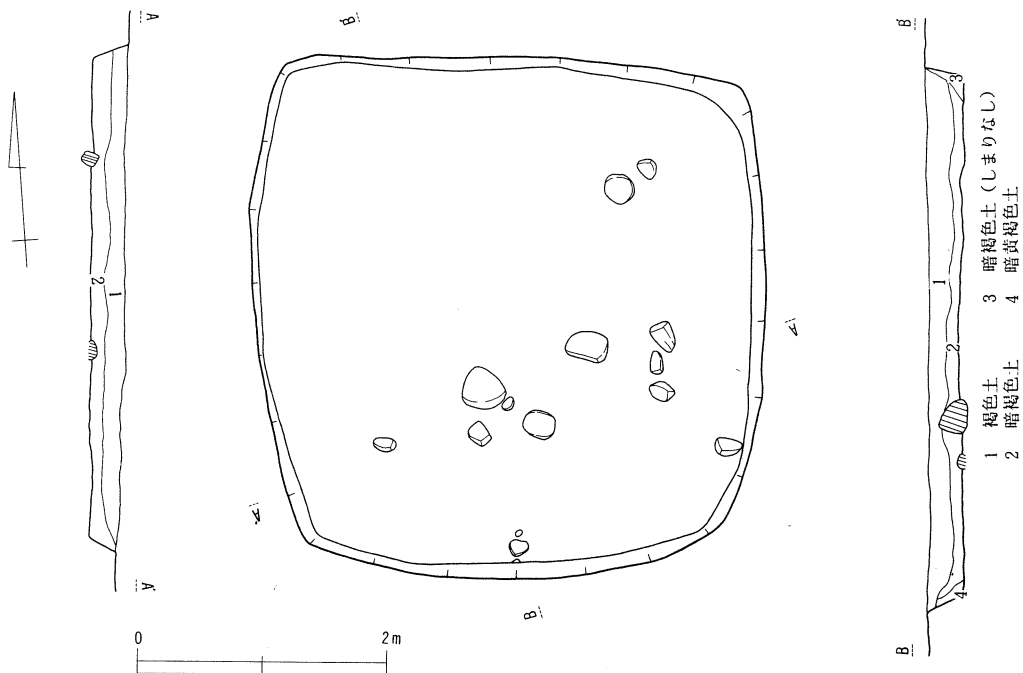


第22図 7号住居址出土遺物 (1/3)

< 8号住居址 > (第23・24図)

【遺構】

調査区南西部に位置する。埋没土は大体褐色土と暗褐色土に分けられる。規模は東西約3.8 m、南北約 3.9 m。平面形は隅円方形を呈する。壁は外傾し、高さ 30 cm前後を測り、比較的良好であった。床面は堅く略平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは検出されなかったが、床面北東側に焼土の散在がみられた。埋没土は上層から褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土の順に堆積している。



第23図 8号住居址 (1/30)

【遺物】

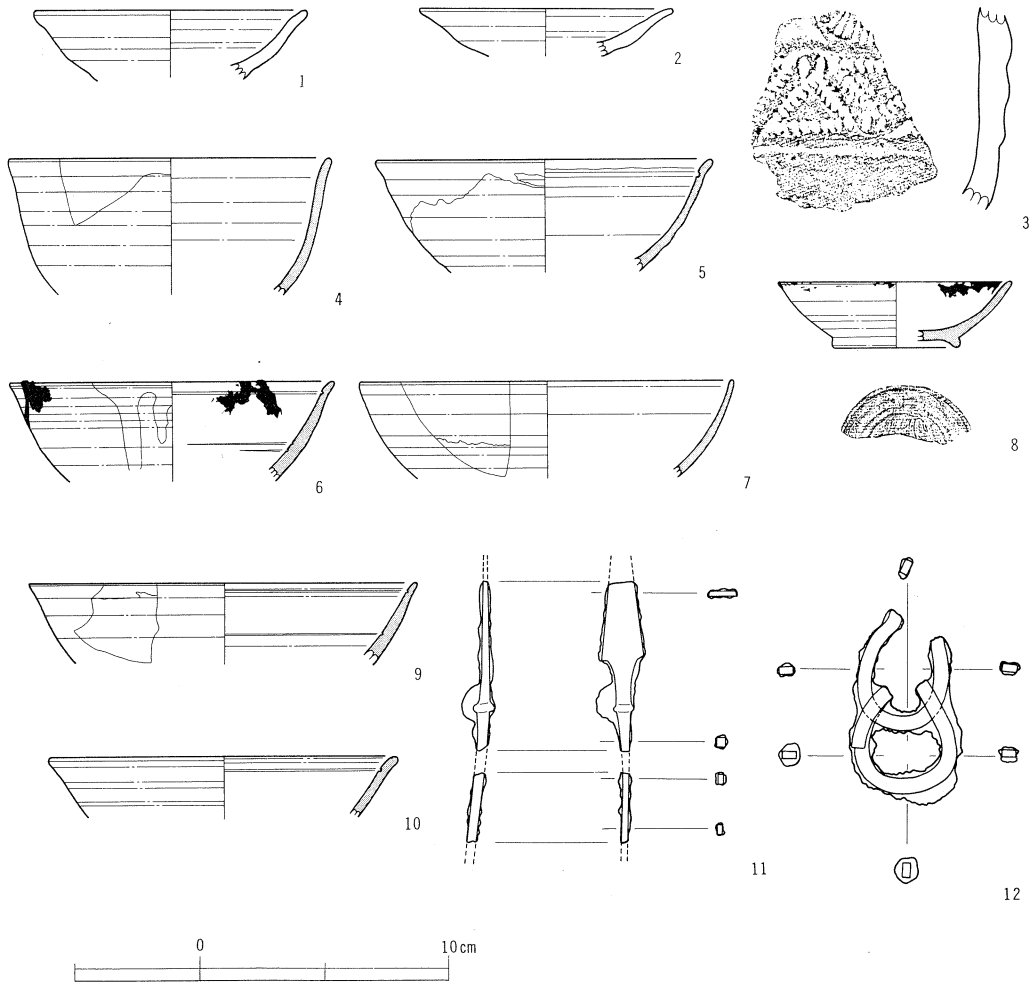
出土遺物は少なく、土師器環・灰釉陶器が破片で出土している。灰釉陶器の中には煤付着の環が2点ばかり見られる。また、鉄鏃などの鉄製品が2点ほど住居址の北東側より出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	環	—, 11.0, —		赤褐色粒を含む	褐色	ロクロ水挽き 破片
2	土師器	環	—, 10.4, —		微砂粒を含む	褐色	ロクロ水挽き 破片
3	縄文	深鉢	—, —, —		砂粒・褐色粒子を含む	暗茶褐色 茶褐色	三角区画の中ベン先状工具による連続縄文 縄文中期の土器片、流れ込みによるもの

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
4	灰 釉	坏	—	13.0, —	精 製	淡 灰 褐 色 淡 灰 緑 色	ロクロ水挽 内面と外面口縁部に灰釉付けがけ 破片
5	灰 釉	坏	—	13.5, —	精 製	灰 黄 白 色	ロクロ水挽き 口縁部に灰釉付けがけ 破片
6	灰 釉	坏	—	13.0, —	精 製	灰 褐 色	ロクロ水挽き 口縁部に煤附着 内面及び外面一部灰釉付けがけ 破片
7	灰 釉	坏	—	15.0, —	精 製	灰 白 色	ロクロ水挽き 内面及び外面下部灰釉付けがけ 破片
8	灰 釉	坏	2.65,	9.4, 5.2	精 製	灰 黄 色	口縁部横撫で 回転糸切り後、付高台 口縁部に煤附着 3/5 欠損
9	灰 釉	坏	—	15.6, —	精 製	灰 茶 褐 色	ロクロ水挽き 内面及び外面口縁部に灰釉付けがけ 破片



第24図 8号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	灰 釉	坏	—, 14.0, —	精 製	灰 白 色 淡 灰 緑 色	ロクロ水挽き 内面に灰釉付けがけ 破片
11	鉄 器	鉄鏃				
12	鉄 器	鐙				鐙をつなぐ馬具の一部と思われる

< 9号住居址 > (第25・26図)

【遺 構】

調査区南西部に位置する。12号住居址を切って構築される。規模は、東西約4.2m、南北約4.3mを測る。平面形はやや胴張り気味の隅円方形を呈する。壁は外傾し、高さ55cm前後を測る。床面は略平坦。柱穴・周溝はない。カマドは、南西隅に南向きにあり、規模は長さ約80cm、幅約90cmで石を用い築かれる。燃烧部は床面より若干窪み、厚さ約3cmで焼土が堆積していた。

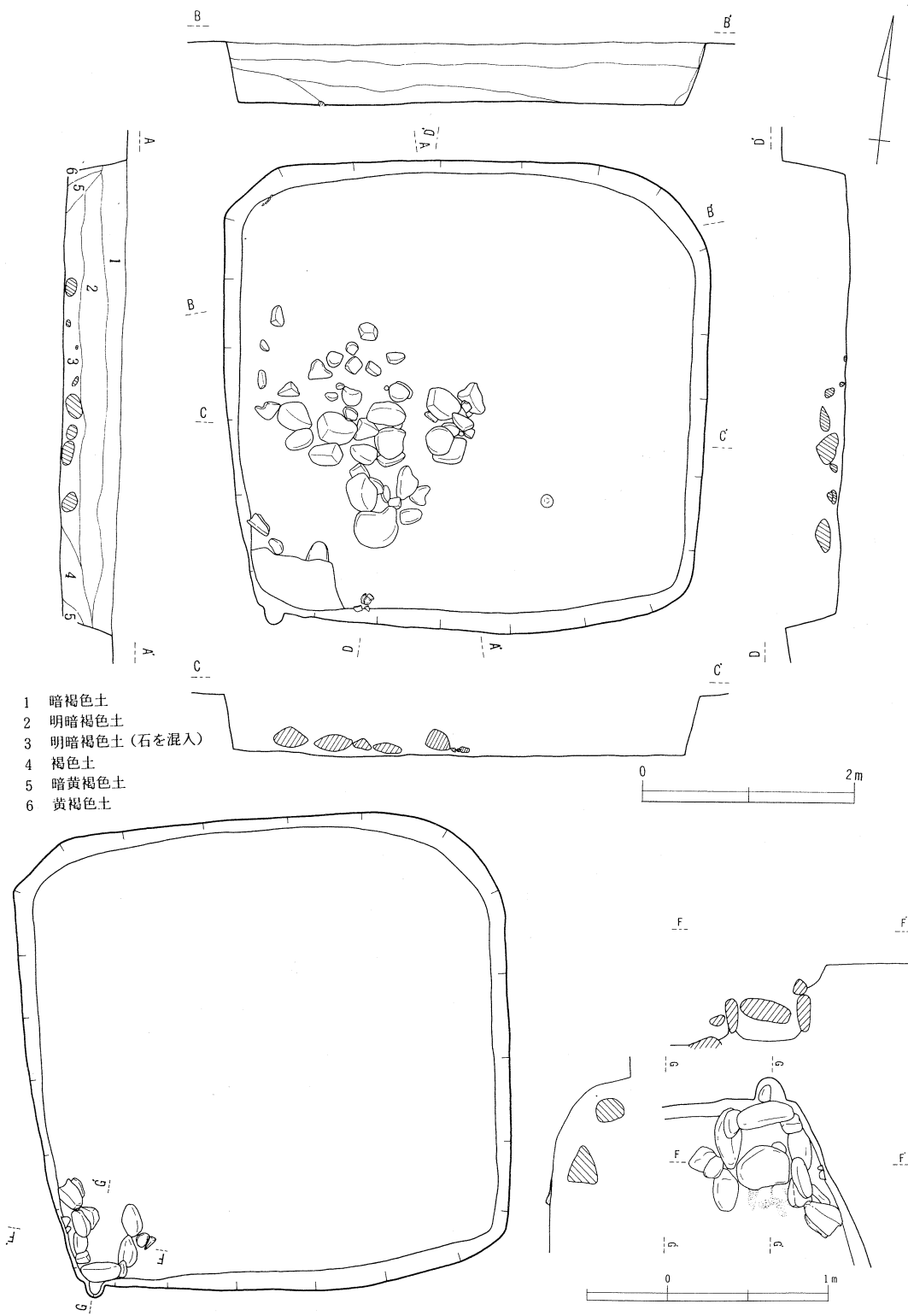
【遺 物】

出土遺物は少なく、略床面直上から土師器皿の完形・灰釉陶器・鉄製品などが出土した。

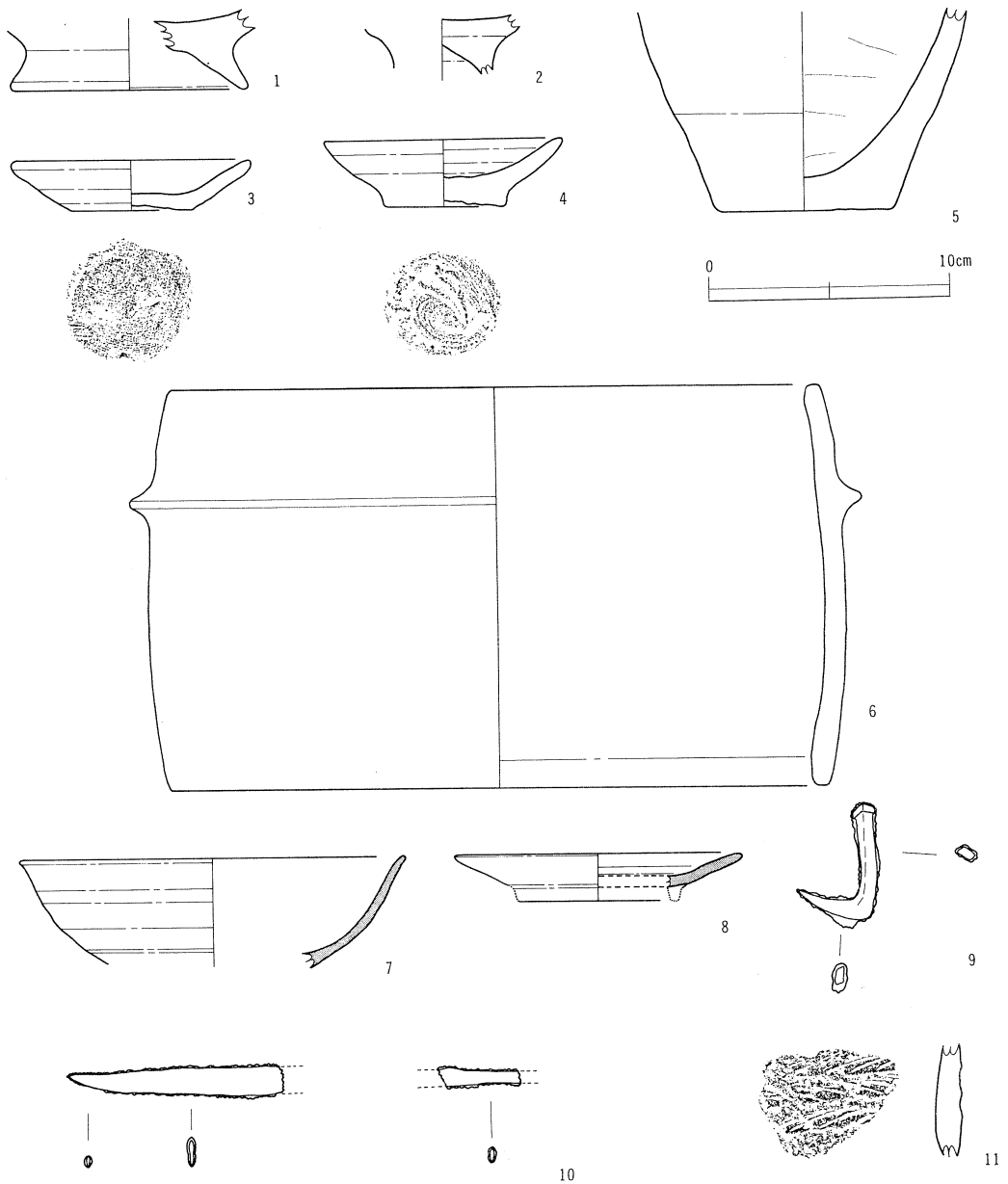
出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	—, —, 9.8	金雲母を含む	茶 褐 色	高台付 破片
2	土師器	坏	—, —, —	金雲母を含む	茶 褐 色	高台付 破片
3	土師器	皿	2.1, 10.0, 5.2	金雲母を含む	黒 褐 色	ロクロ水挽き、底部回転糸切り痕 1/3欠損
4	土師器	皿	2.8, 10.0, 5.0	金雲母を含む	茶灰黒褐色	ロクロ水挽き、底部回転糸切り痕 完形
5	土師器	甕	—, —, 7.2	砂粒を含む	暗茶褐色 茶 褐 色	器面は撫で整形 破片
6	土師器	甗	16.7, 27.0, 27.3	細かい砂粒を含む	暗茶褐色	器面は撫で整形、底の縁は削られ整形さ れている。羽釜を二次利用したものか。 2/3欠損
7	灰 釉	塊	—, 16.0, —	精 製	灰白黄色	ロクロ水挽き 破片
8	灰 釉	皿	—, 12.0, —	精 製	灰白黄色	ロクロ水挽き 破片
9	鉄 器	釘				釣針状に曲っている
10	鉄 器	刀子				
11	縄 文	深鉢	—, —, —	砂粒を含む	茶 褐 色	縄文前期浮線文系の土器片 流れ込みによるものである



第25図 9号住居址 (1/60) カマド (1/40)



第26図 9号住居址出土遺物 (1/3)

<10号住居址> (第27・28図)

【遺構】

調査区南西部に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は東西約3m、南北約3.4mを測る。平面形は隅円長方形を呈する。壁は外傾し、比較的良好な立ち上りを見せ、壁高は35cm～50cm前後を測り、北壁が高い。南壁上部は11号住居址と重複してお

り明瞭ではなかった。床面は平坦で良好である。柱穴・周溝は確認されない。カマドラしき遺構は検出されなかった。

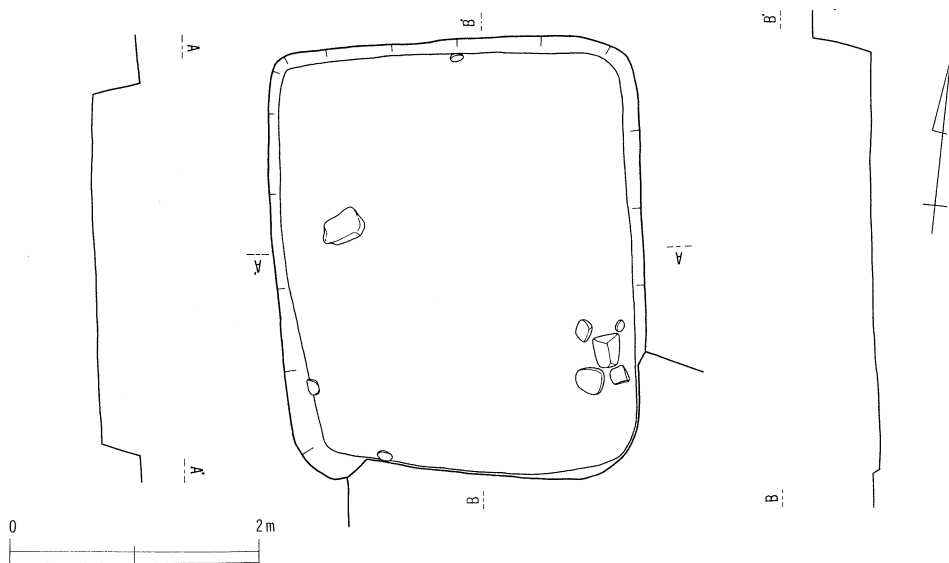
【遺物】

遺物の出土は極めて少なく、須恵器甕・青磁皿の破片などが出土している。

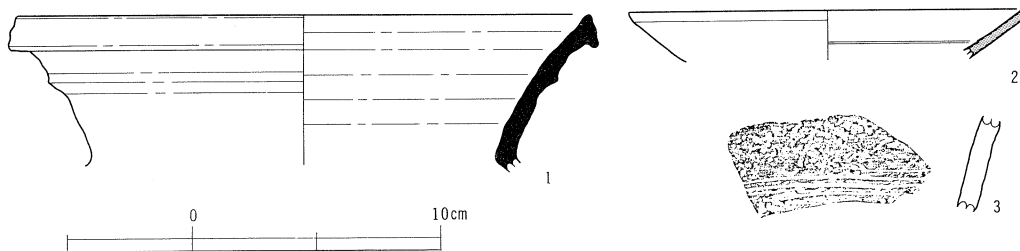
出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他	
			量				
			器高・口径・底径				
1	須恵器	甕	—, 23.0, —	砂粒を含む	灰色	口縁部破片	
2	青磁	皿	—, 16.0, —	精製	淡灰緑色	口縁部破片	
3	縄文	深鉢	—, —, —	金雲母を含む	暗茶褐色	縄文前期、竹管文系土器片 流れ込みによるものである	



第27図 10号住居址 (1/30)



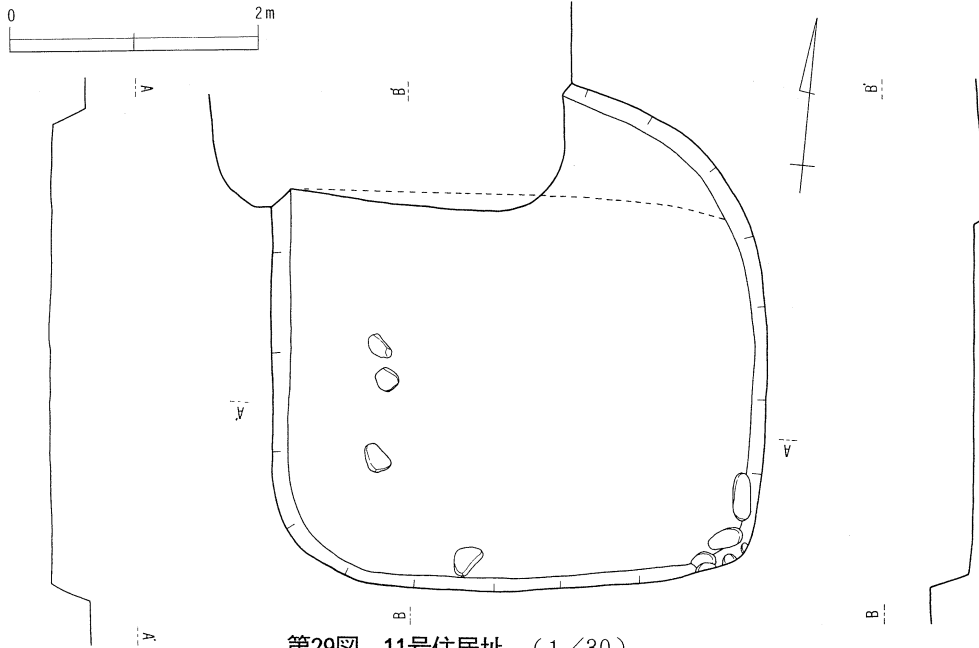
第28図 10号住居址出土遺物 (1/3)

<11号住居址> (第29・30図)

【遺構】

調査区南西部に位置する。北西部は10号住居址と重複し不明瞭であった。埋没土は、大体褐

色土と暗褐色土に分けられる。規模は東西約 3.9 m、南北約 2.9 m。平面形は隅円長方形を呈する。壁は外傾し、良好な立ち上りを見せ、壁高は 30 cm 前後を測る。北壁は 10 号住居址に切られている。床面は平坦。柱穴・周溝はない。カマドラしき遺構は検出されなかったが、床面中央に焼土が散在していた。



第29図 11号住居址 (1/30)

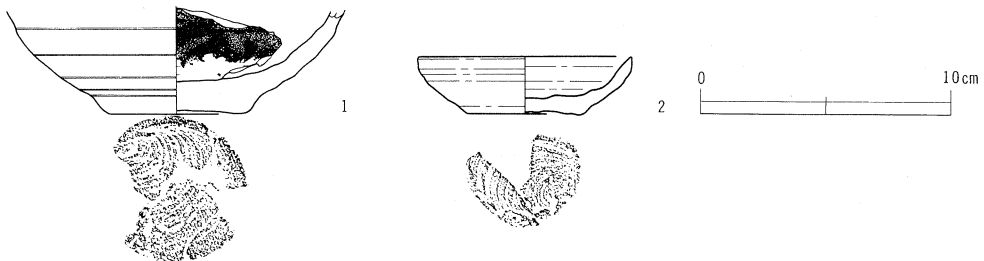
【遺物】

遺物の出土は極僅かであるが、煤付着の土師器坏などが出土している。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	—, —, 4.9	砂粒を含む	茶 褐 色	内面、煤付着 火を受けたらしく脆い 1/2 欠損
2	土師器	坏	2.25, 8.5, 4.5	金雲母を多 量に含む	暗 褐 色 暗 茶 褐 色	底部回転糸切り痕 1/4 欠損

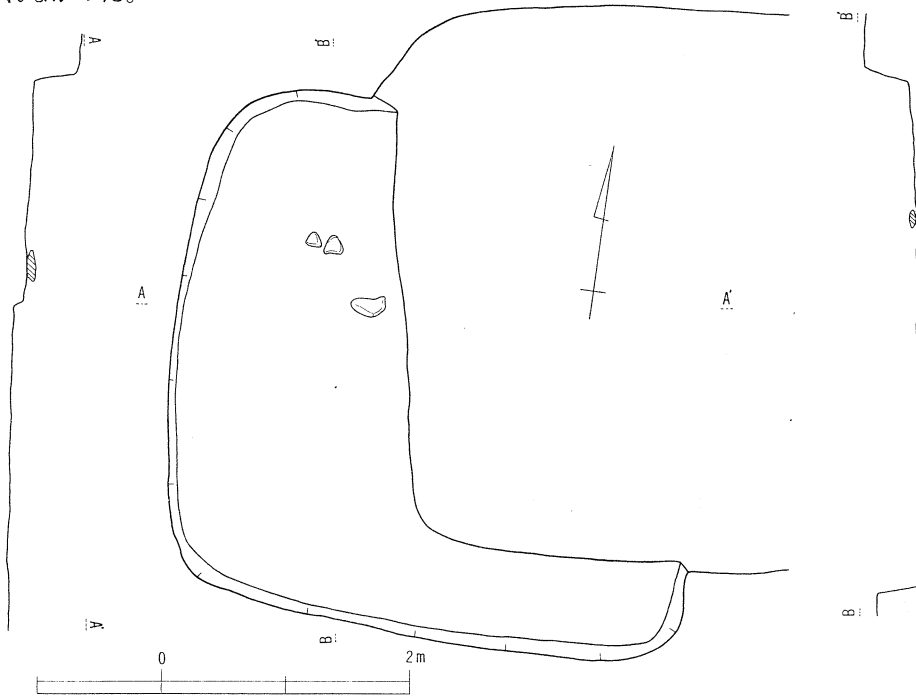


第30図 11号住居址出土遺物 (1/3)

<12号住居址> (第31・32図)

【遺構】

調査区南西部に位置する。12号住居址の大半は、9号住居址に切られ遺存していない。9号住居址の壁面に床面を発見し発掘する。規模は、一辺約4m前後を測る。平面形は隅円方形であろう。壁は比較的直に立ち上り、壁高は35cm前後を測る。9号住居址との床面の比高差は約10cm。床面は暗褐色土で、堅く略平坦である。柱穴・周溝はない。カマドラしき遺構は検出されなかった。



第31図 12号住居址 (1/30)

【遺物】

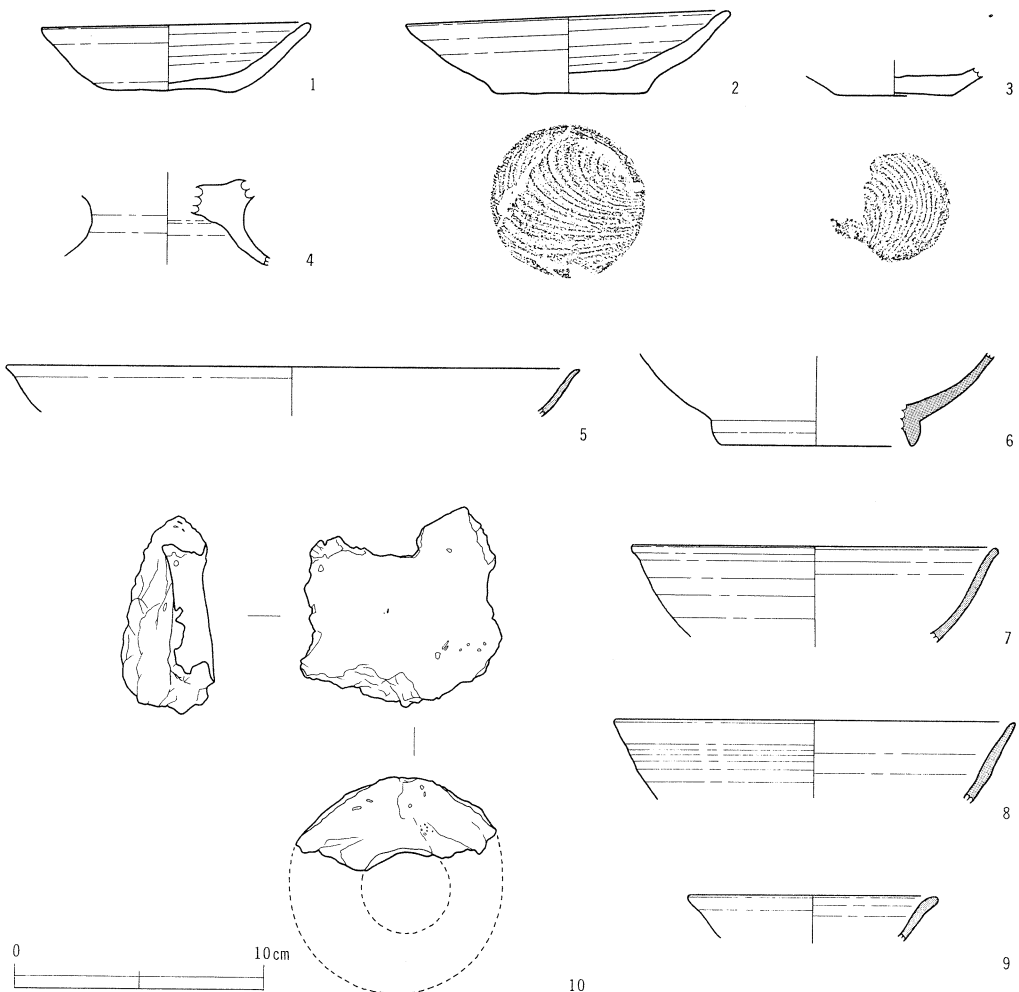
遺物は少なく、土師器坏類・緑釉皿などが破片で出土。特殊なものとして鞆の羽口が出た。

出土遺物一覧

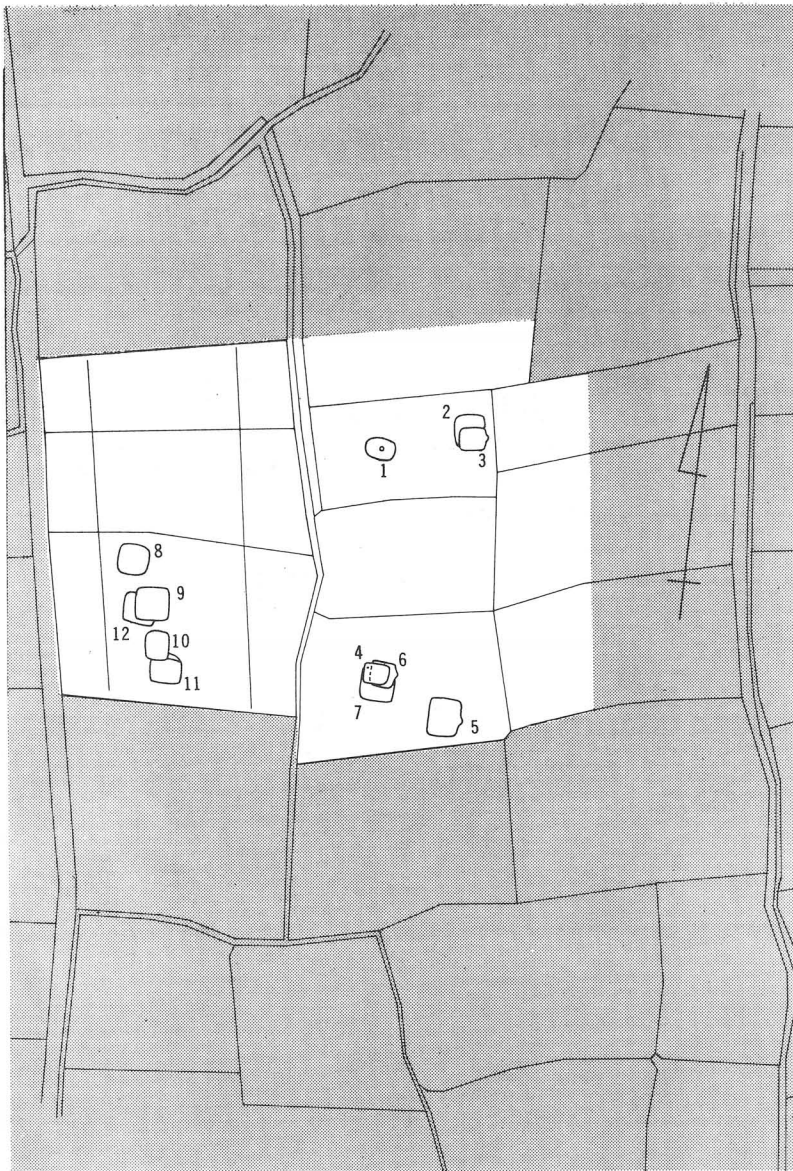
(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	坏	2.6, 10.8, 4.9		砂粒・赤褐色粒を含む	褪 褐 色	ロクロ成形 磨滅により器面はザラつく 口縁部若干欠損
2	土師器	皿	3.0, 12.9, 6.0		砂粒・赤褐色粒を含む	褪 明 褐 色	ロクロ成形 底部回転糸切り痕 1/4 欠損
3	土師器	皿	—, —, 4.6		金雲母を多量に含む	茶 黄 褐 色 暗 白 褐 色	底部回転糸切り痕 底部破片
4	土師器	坏	—, —, —		砂粒を含む	茶 褐 色	ロクロ成形、高台付 破片

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
5	灰陶 釉器	皿	—	22.9, —	精 製	淡 灰 色	ロクロ水挽き 口縁部破片
6	灰陶 釉器	碗	—	—, 7.7	黒色・白色 粒子を含む	灰 白 色 系	ロクロ水挽き 釉はつけかけ 破片
7	灰陶 釉器	碗	—	14.6, —	密	白 黄 灰 色	ロクロ水挽き 3/4 欠損
8	灰陶 釉器	碗	—	16.0, —	黒色粒子を 含む	白 灰 色	ロクロ水挽き 口縁部破片
9	緑陶 釉器	碗	—	9.9, —	白色粒子を 含む	暗 緑 色	磨滅がはげしい 口縁部破片
10		轆の 羽口				薄 茶 褐 色 外 面 一 部 変 黒	熱を受けたせいか脆い 破片



第32図 12号住居址出土遺物 (1/3)



第33図 前田遺跡全体図 (1:1,000)

<遺構外出土遺物> (第34図)

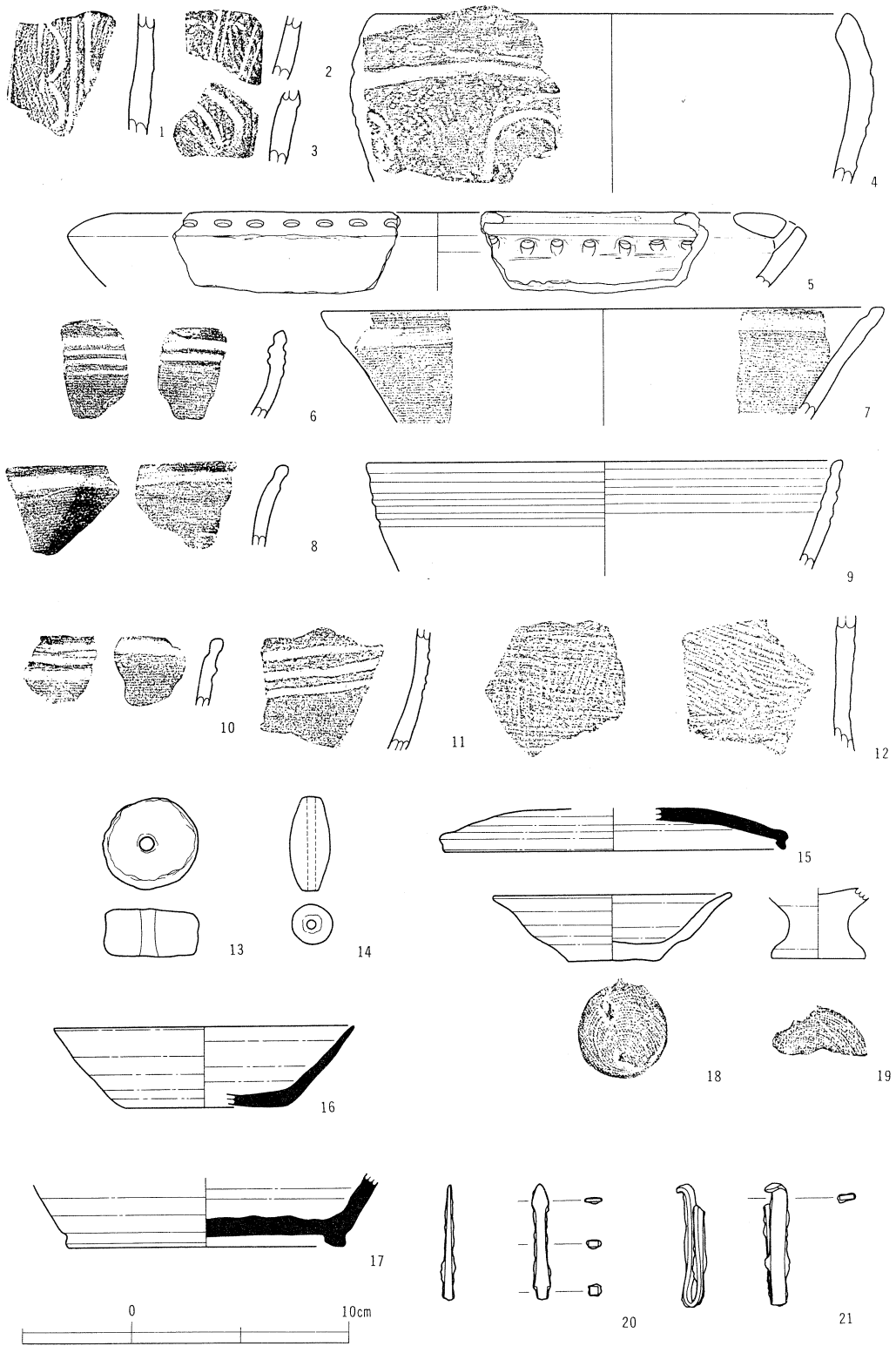
本遺跡からは、遺構外からも遺物が出土している。以下に何点か特徴のあるものを紹介してみよう。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径		(外面 内面)	
1	縄文土器	深鉢	—, —, —	やや粗い砂粒を含む	暗茶褐色 灰黄褐色	縄文を地文 沈線による列点弧文等を垂下 縄文中期初頭の土器片

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他	
			器高	口径				底径
2	縄土 文器	深鉢	—	—	—	白色粒子を含む	茶 褐 色	縄文を地文 沈線を垂下 縄文中期初頭の土器片
3	縄土 文器	深鉢	—	—	—	金雲母白色 粒子を含む	茶 褐 色	縄文を地文 沈線文 縄文中期初頭の土器片
4	縄土 文器	深鉢	—	22.0	—	やや粗い 砂粒・白色 粒子を含む	白 黄 褐 色	口縁部無文帯 比較的太い沈線により 縄文と無文を分ける 縄文中期末の土器 口縁部破片
5	縄土 文器	鉢	—	34.0	—	金雲母を含 む	茶 褐 色	縄文前期 諸磯 b 式併行の有孔 土器 口縁部破片
6	縄土 文器	鉢	—	—	—	白色粒子を 含む	茶 褐 色 白 灰 褐 色	6～11は口縁部に沈線隆線帯が めぐる縄文晩期中葉の土器片 口縁部破片
7	縄土 文器	鉢	—	26.0	—	砂粒を含む	白 黄 褐 色	口縁部破片
8	縄土 文器	鉢	—	—	—	白色粒子を 含む	暗 灰 褐 色	口縁部破片
9	縄土 文器	鉢	—	22.0	—	白色粒子を 含む	黄 褐 色 淡 茶 褐 色	口縁部破片
10	縄土 文器	鉢	—	—	—	細い金雲母 を少量含む	茶 褐 色 黄 灰 褐 色	口縁部破片
11	縄土 文器	鉢	—	—	—	砂粒を含む	白 灰 褐 色	破片
12	縄土 文器		—	—	—	やや粗い 砂粒を含む	黄 褐 色	内外面に条痕文が顕著 縄文晩期の土器片であろう
13		土製 紡錘 車	幅	厚	孔径	砂粒を含む	暗 褐 色	完形
14		土錘	長さ	最大径	孔径	砂粒を含む	褪 赤 褐 色	外面、細かい刷毛目痕あり 完形
15	須恵器	蓋	1.95	16.0	—	白色粒子を 含む	灰色(内面 及び外面の 縁)黄灰色	外面上半、回転ヘラ削り 1/4 残存
16	須恵器	坏	3.7	13.8	7.1	白色粒子を 多量に含む	褐色(一部 茶褐色) 黄褐色	焼成不良である 内面に暗茶褐 色の斑点あり 1/4 残存
17	須恵器	壺	—	—	13.0	白色粒子を 含む	灰 色	内面底部、自然釉 破片
18	土師器	坏	3.0	11.0	4.2	微砂粒子を 含む	茶 褐 色	ロクロ水挽き 底部回転糸切り痕 口縁部一部欠損
19	土師器	台付 坏	—	—	4.4	白色及び褐 色粒子を含 む	褐 色	ロクロ水挽き 底部、回転糸切り痕
20	鉄 器	鉄鏃						
21	鉄 器	不明						



第34図 遺構外出土遺物 (1/3)

V 前田遺跡出土炭化材同定

1 試料

試料は5号住居址から検出された炭化材24点である。同住居址は平安時代のもとのされる焼失住居で、試料はその建築材とみられる。試料には試料番号の記されたものとそうでないものがあつたが、作業の便宜のためNo.1～24の番号を付した(表1)。本報文中では試料は全てこの試料番号で表すこととする。

2 方法

試料は、いくつかの炭化材片が多量の土壌と混じった状態で送付されてきた。そこで、各試料の中から比較的大きめの材片1点を選び出し同定試料とした。試料を乾燥させたのち、木口・柀目・板目三断面を作成、実体顕微鏡ならびに走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版16, 17)も作成した。

3 結果

4種類(Taxa)が同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質はつぎのようなものである。また、同定結果を一覧表(表1)で示した。

●クマシデ属の一種(Carpinus sp.) カバノキ科 No.6

散孔材で、管孔は放射方向に2～8個が複合する。横断面では楕円形、単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は短接線状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

クマシデ属は、イワシデ(Carpinus turzaninovii)、イヌシデ(C. tschonoskii)、アカシデ(C. laxiflora)、クマシデ(C. japonica)、サワシバ(C. cordata)の5種が自生する。このうちクマシデ・サワシバは階段穿孔を持つことで、前3種と区別できる。イワシデは本州(中部地方)・四国・九州の石灰岩地に生育し、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州に、イヌシデは本州(岩手県以南)・四国・九州に生育する温帯性落葉高木～低木である。アカシデ・イヌシデは山野に普通に見られ、二次林の構成種でもある。材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

●コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種(Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.) ブナ科 No.2, 4, 5, 7, 8, 13, 14, 15, 17, 18, 20, 21, 22, 24.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有

し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20 mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

●コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種〔*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.〕 ブナ科 No. 1. 3. 9. 10. 11. 16. 19. 23.

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ（*Q. variabilis*）の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15 mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、櫓木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

●ケヤキ（*Zelkova serrata*） ニレ科 No. 12

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～60細胞高。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽さ

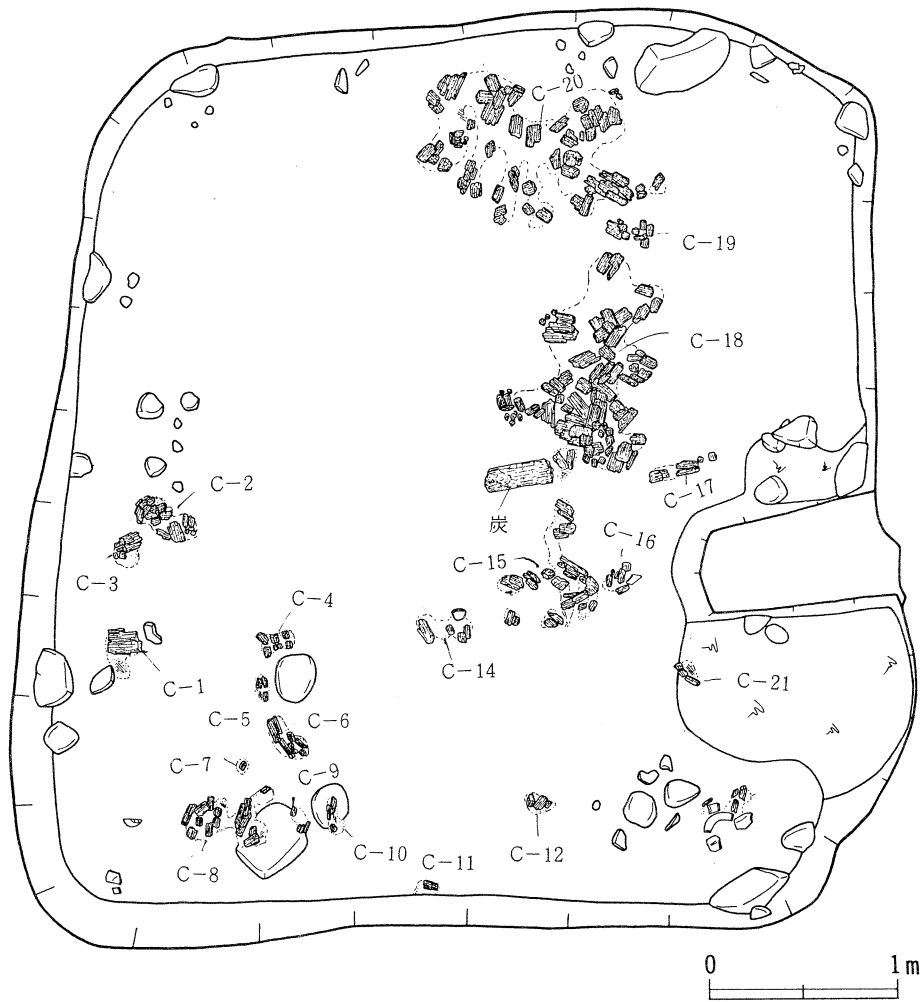
れる落葉高木で、時に樹高 50 m にも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

表 1 前田遺跡 5 号住居址出土炭化材の樹種

試料番号	試料名	種名
1	C-1	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
2	C-2	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
3	C-3	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
4	C-4	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
5	C-5	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
6	C-6	クマシデ属の一種
7	C-7	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
8	C-8	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
9	C-9	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
10	C-10	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
11	C-11	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
12	C-12	ケヤキ
13	C-14	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
14	C-15	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
15	C-16	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
16	C-17	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
17	C-18	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
18	C-19	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
19	C-20	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
20	C-21	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
21	—	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
22	炭	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
23	炭	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
24	—	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種

4 考 察

24点中コナラ節が14点、クヌギ節が8点を占めている。これらナラ類の材は重硬であることから、柱など主要構造材として用いられたものである可能性は高いものと考えている。同時にナラ類の材は炭材としても優れていることから他の樹種よりも炭化材として残存しやすかったともいえよう。この2種類の材の占める割合の高さは、2つの要因の相乗的な効果によるものと考えている。また、添付資料から判断するかぎりでは、同一試料番号で一括されたものであっても同一材の破片とは考えにくいものもある。ここで同定された4種類のほかの樹種が認められる可能性はあると考えている。当時の建築材の用材を明らかにするためには、可能なかぎりの資料を集めたうえで検討する必要があるだろう。



第35図 5号住居址出土炭化材試料図

Ⅵ ま と め

今回の発掘調査で発見された住居址は12軒で、出土遺物により奈良時代2軒（2・7号住居址）、平安時代10軒（1・3・4・5・6・8・9・10・11・12号住居址）となっている。以下、時代を追って概観し、まとめとする。

◆奈良時代（図表1）

2号住居址出土の土師器杯は、底部全面手持ち篋削りし器体部下端に稜を有する特徴的なものとなっている。年代的にはおよそ8世紀前半となろう。土師器甕についてみると、外面胴部上半を横位と下半を縦位、内面胴部上半横位の刷毛目整形が施される丸底の球胴甕。内面口縁部胴部とも横位、外面胴部は縦位と横位の刷毛目整形される口縁のひらく鉢状のもの、ロクロ撫で整形の後、外面と口縁部内側にカキ目が施される角口縁の甕。胴部外面を縦位の篋削りする甕など多様である。

7号住居址出土の土師器杯は、底部端が角ばって口縁部へ至る盤状のもので、底部は全面を手持ち篋削りされるものであり、年代的には8世紀後半に位置づけられる。


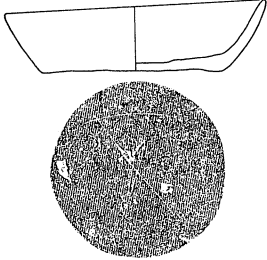
8世紀代の住居址は、前田遺跡の周辺では中田小学校遺跡に8世紀後半の住居址が4軒発見されているが、今回、それまで市内には類例の無かった8世紀前半の遺物と住居址が確認されたことは、歴史的に価値を持つものと期待される。

◆平安時代（図表2・3・4）

比較的遺物の出土が多かった3・5・6号住居址についてみていく。

3・6号住居址出土の須恵器杯は、底部回転糸切り離し後無調整で、口径12～13cm・底径6～7cm・器高3.5～4cm代のものが主体で、高台付杯は口径15～16cm代の大型の深いものとなっている。3号住居址出土のものが若干大ぶりとなっている。土師器杯は破片であるが、外面器体部下半篋削りされ、みこみ部及び内面に暗文が施され、口唇部が細く尖ったような形状を呈する。これらの須恵器・土師器杯の形態から、甲斐地域Ⅵ～Ⅶ期（註1）・中田小学校遺跡Ⅳ～Ⅴ期（註2）の年代観が得られ、およそ9世紀中葉頃に位置づけられる。（6号住居址出土のものが後出的であるか？）甕についてみると、須恵器甕の他に、土師器では刷毛目整形の小型甕、ロクロ横撫で整形の小型甕、刷毛目整形の甕、角状口縁のロクロ撫で整形の甕がみられる。

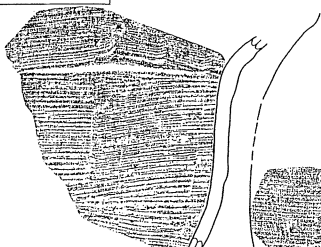
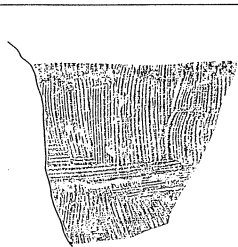
5号住居址は、須恵器杯はみられなかった。土師器杯は、口径11cm前後・底径5.5cm前後・器高4cm代のものと、それらよりひとまわり大きいものがあり、みこみ部を除き内面に暗文があり、外面器体部下半篋削りされる例がある。底部は回転糸切り離し後外周を篋削りしている。土師器皿は、盤状の平たいもので、口縁部は折れて斜めに立ち上がり、外面器体部下半～底部は回転の篋削りがなされる。内面に暗文のあるものもある。この土師器杯・皿の形態から甲斐地域Ⅷ期（註3）、中田小学校遺跡Ⅴ期（註4）以降の年代観が得られ、およそ9世紀第4四半期が当てられる。甕は、須恵器甕の他に、土師器の刷毛目整形の甕、破片ではあるがロクロ撫で整形のものがみられる。

	須 恵 器 坏	土 師 器 坏
8 世 紀 前 半		 <p>(2-6-1)</p>
8 世 紀 後 半		 <p>(7-22-1)</p>

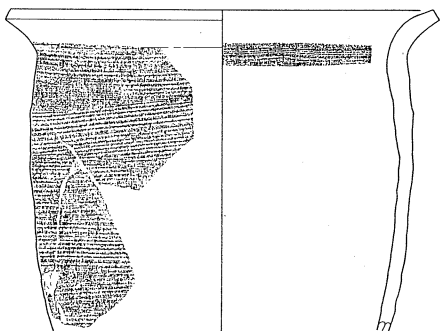
< 図表 1 >

蓋

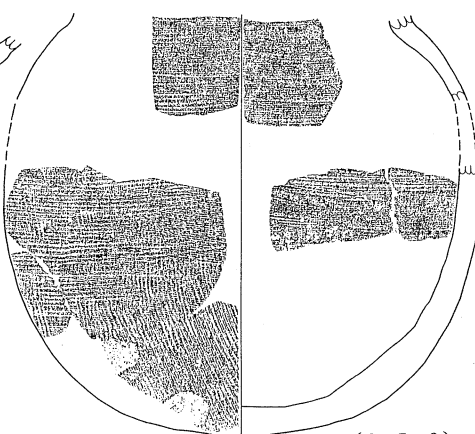
甕・その他



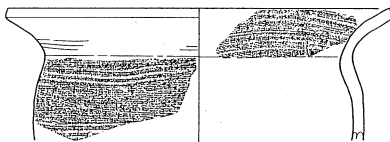
(2-6-8)



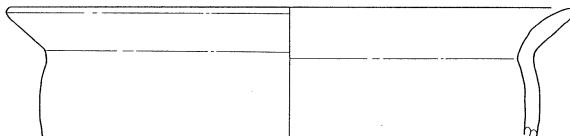
(2-6-7)



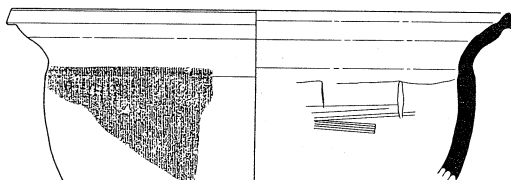
(2-7-9)



(2-6-5)



(2-6-6)

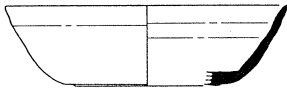


(住居址番号-挿図番号-遺物番号)

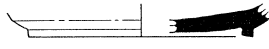
須 恵 器 坏

土 師 器 坏 · 皿

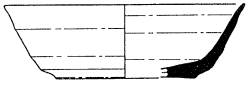
9
世
紀
中
葉



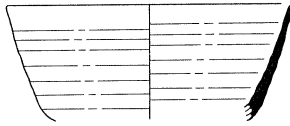
(3-9-4)



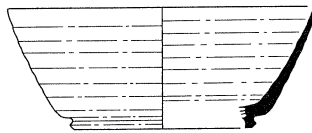
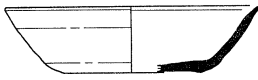
(3-9-7)



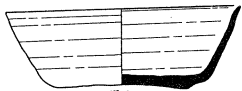
(3-9-5)



(3-9-8)



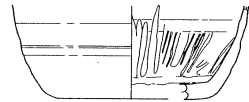
(3-9-9)



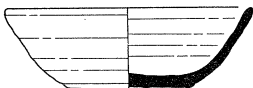
(6-19-4)



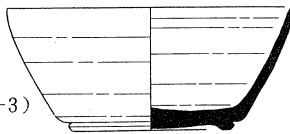
(6-19-5)



(6-20-9)



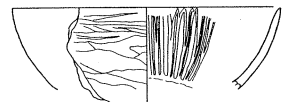
(6-19-3)



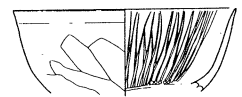
(6-19-6)



(6-20-10)

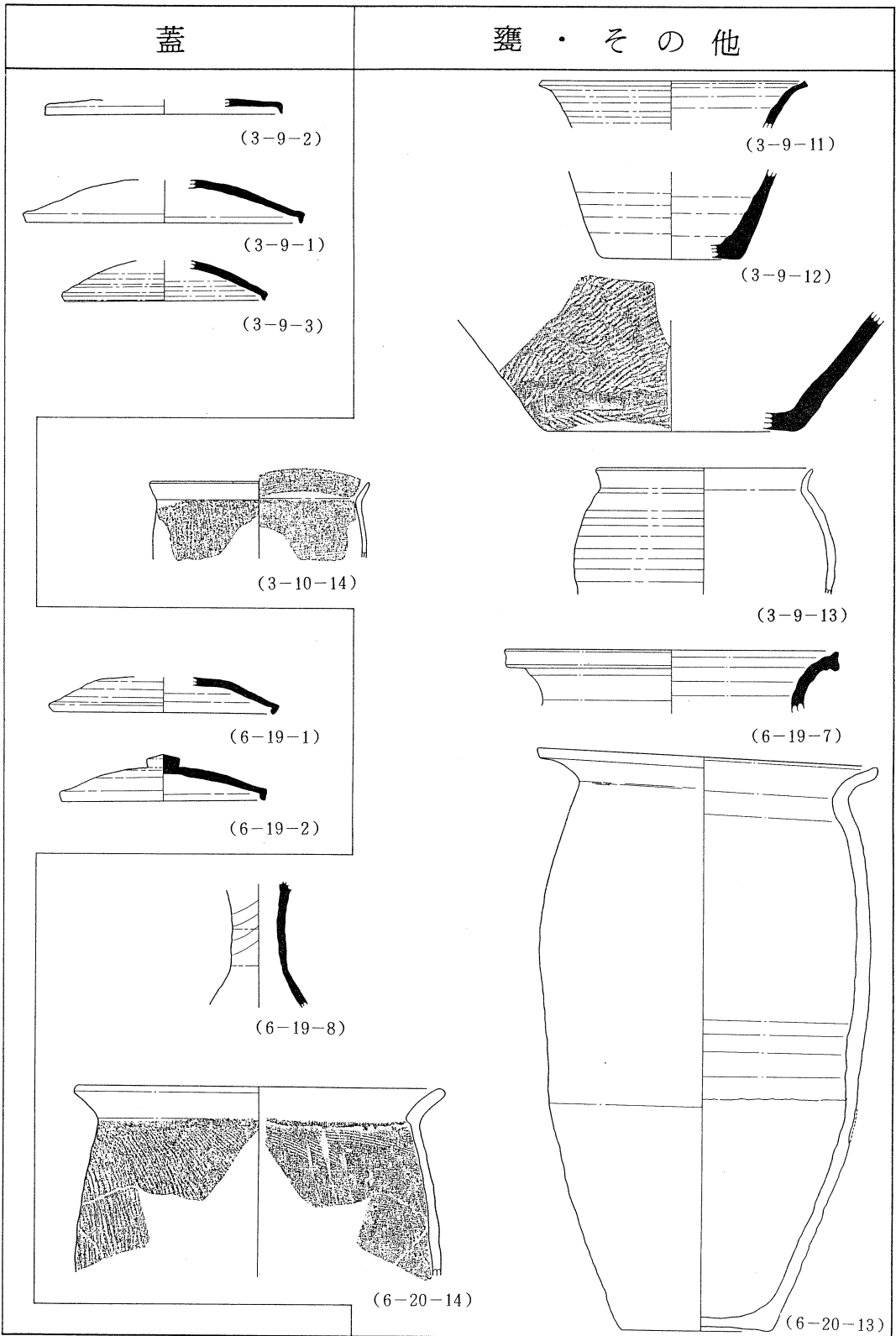


(6-20-11)



(6-20-12)

< 図 表 2 >



(住居址番号-挿図番号-遺物番号)

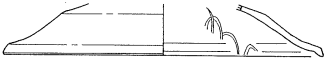
	須 惠 器 坏	土 師 器 坏 ・ 皿
<p>9 世 紀 第 4 四 半 期</p>		<p>(5-15-4)</p> <p>(5-15-7)</p> <p>(5-15-8)</p> <p>(5-15-9)</p> <p>(5-16-13)</p> <p>(5-16-14)</p> <p>(5-16-15)</p> <p>(5-16-16)</p> <p>(5-16-17)</p>

< 図 表 3 >

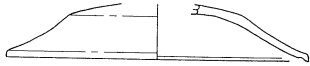
甕・その他



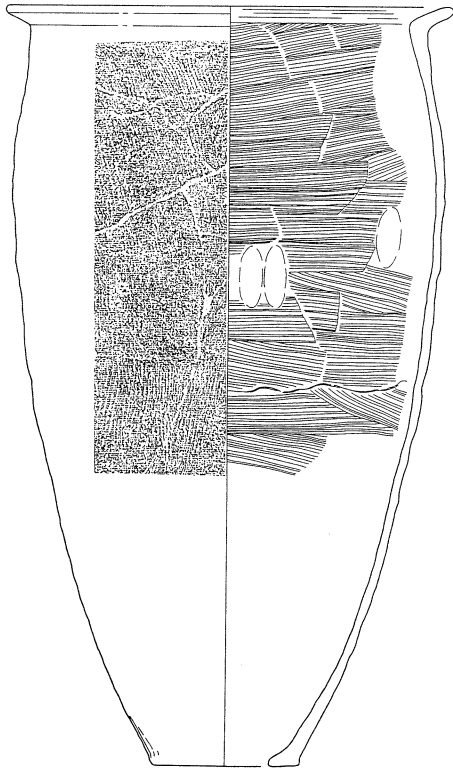
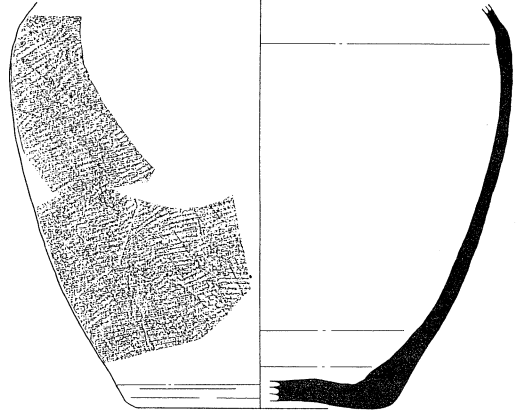
(5-15-1)



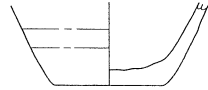
(5-15-2)



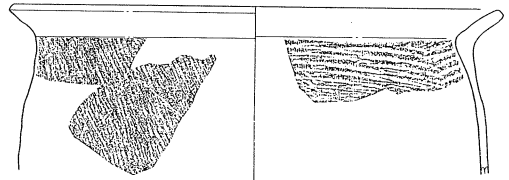
(5-15-3)



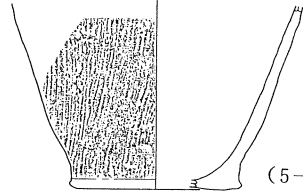
(5-15-5)



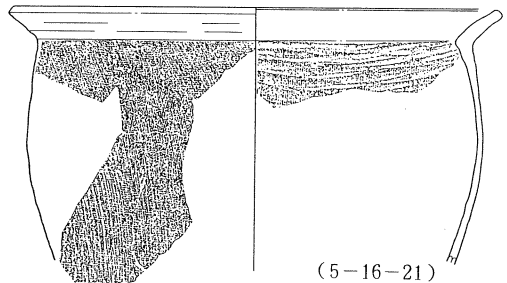
(5-16-20)



(5-16-22)

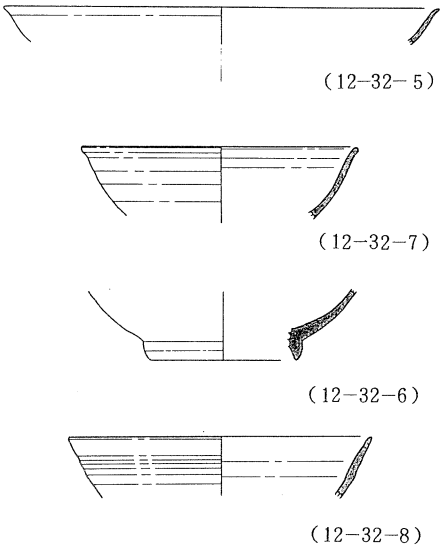
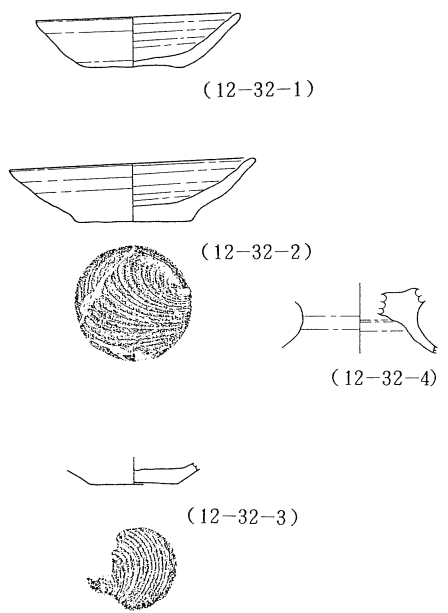
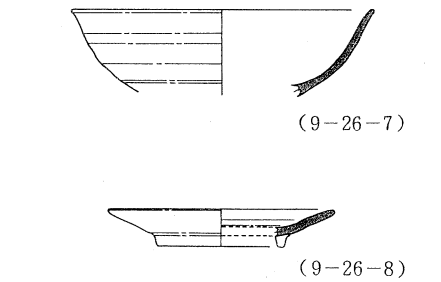
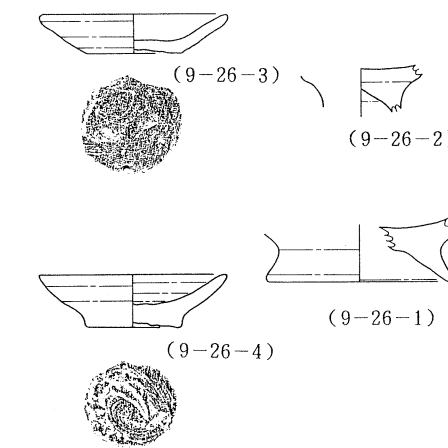


(5-16-19)

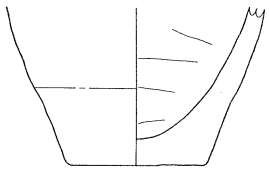
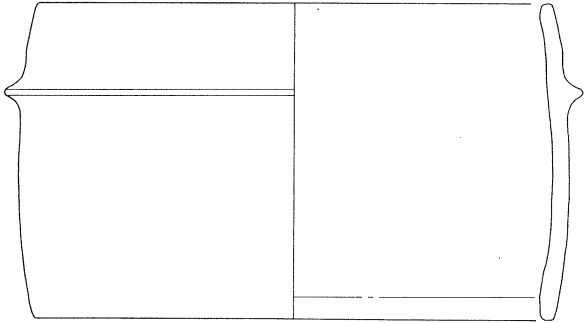


(5-16-21)

(住居址番号-挿図番号-遺物番号)

	灰釉陶器類	土師器 坏・皿
11世紀中葉	 <p>(12-32-5)</p> <p>(12-32-7)</p> <p>(12-32-6)</p> <p>(12-32-8)</p>	 <p>(12-32-1)</p> <p>(12-32-2)</p> <p>(12-32-4)</p> <p>(12-32-3)</p>
11世紀後半	 <p>(9-26-7)</p> <p>(9-26-8)</p>	 <p>(9-26-3)</p> <p>(9-26-2)</p> <p>(9-26-1)</p> <p>(9-26-4)</p>

< 図表 4 >

蓋	甕・その他
	 <p data-bbox="1035 1271 1145 1298">(9-26-5)</p>  <p data-bbox="1077 1684 1186 1711">(9-26-6)</p>

(住居址番号-挿図番号-遺物番号)

限られた調査であるが、出土遺物からの年代観により、当該地域には中田小学校遺跡を含め8世紀から9世紀にわたって住居址が確認されており、奈良時代から平安時代の前半にかけて集落が存在したと思われる。しかし、10世紀以降は住居址が確認されず、11世紀に入って再び住居址が出現し、集落が形成されるようである。

今回の調査の内、11世紀代の遺物を出土した9号住居址と12号住居址は、切り合いによる新旧関係があり、時間的差異がみられる。

12号住居址出土の土師器杯は、口唇部が丸く、器の厚さは厚ぼったく感じられる。杯か皿かの判断に苦慮するような平たい形態をとり、底部の厚いものとそうでないものがある。高台付杯は足高高台を付けたもの。灰釉陶器は破片であるが、孤状の三日月高台をもつものがみられる。甕類は出土しなかった。

9号住居址出土の土師器杯は、さらに器高が低くなり、皿状となる。底部が台状に厚くつくられるものがある。足高高台付杯は、12号住居址のものより厚ぼったい感じとなる。これらの土師器は胎土に金雲母を多く含む特徴をもつ。土師器甕類は、撫で整形のもの、鐙の一周する蒸籠風の甕がある。灰釉陶器も若干出土しており、破片ではあるが段皿の段は比較的削りが甘くなっているものである。

灰釉陶器によってみると、12号住居址出土のものは大原2号窯式、9号住居址出土のものは虎溪山1号窯式に当ると思われるが、土師器杯はともに古代末期甲斐国編年のⅢ～Ⅳ期(註5)以降の年代観が得られるので、ここでは大まかに、12号住居址出土のものを11世紀中葉、9号住居址出土のものを11世紀後半に位置づけておくことにする。

なお、1・8・11号住居址は出土遺物から、11～12世紀代の遺構であろう。4・10号住居址は不明である。

以上、概略ではあるが、出土土器等を通じてその年代観をとらえ、住居址の変遷をみてきたわけであるが――集落址とするには数量的に問題があるが、拡大解釈を許していただき、集落のあり方としてとらえると、本遺跡では8世紀9世紀と略つながる集落は、9世紀末～10世紀に突如としてなくなり、再び集落が営まれるようになるのは11世紀以降となる結果となった。

註1・3 坂本美夫・他 「甲斐地域」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会 1983年

註2・4 山下孝司 『中田小学校遺跡』 韮崎市教育委員会 1985年

註5 坂本美夫 「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986年

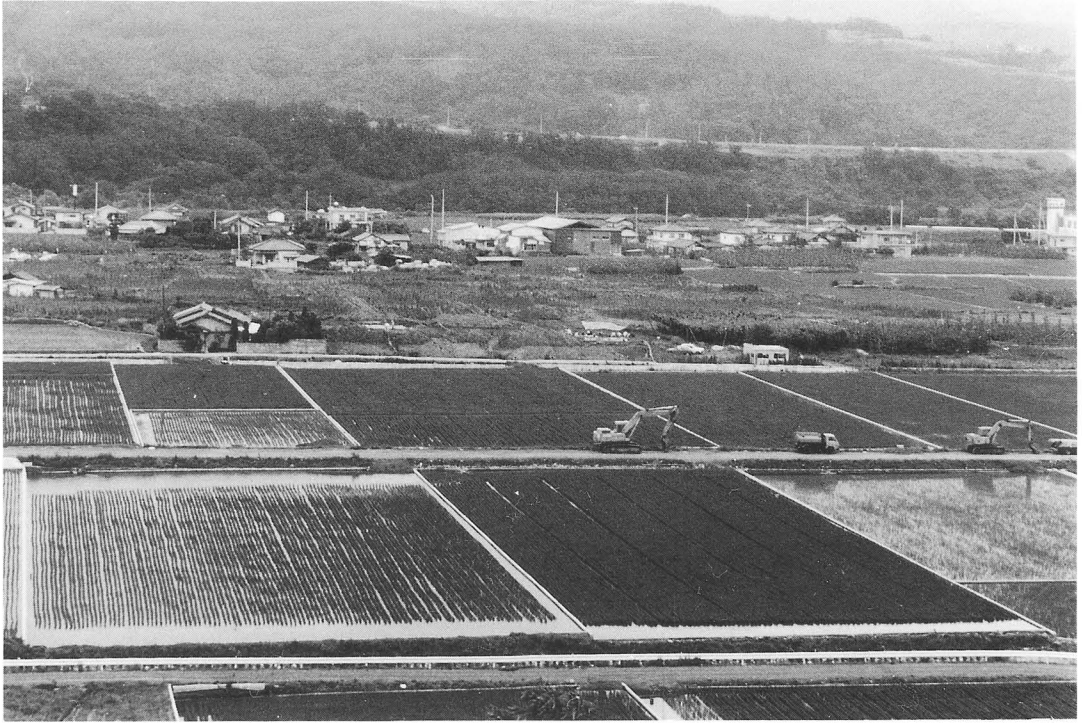
【参考文献】

田口昭二 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No.211
ニューサイエンス社 1982年

山下孝司 「奈良時代における甲斐の土器編年」『山梨考古学論集Ⅰ』 山梨県考古学協会 1986年

保坂康夫 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨県考古学協会誌』
第2号 山梨県考古学協会 1988年

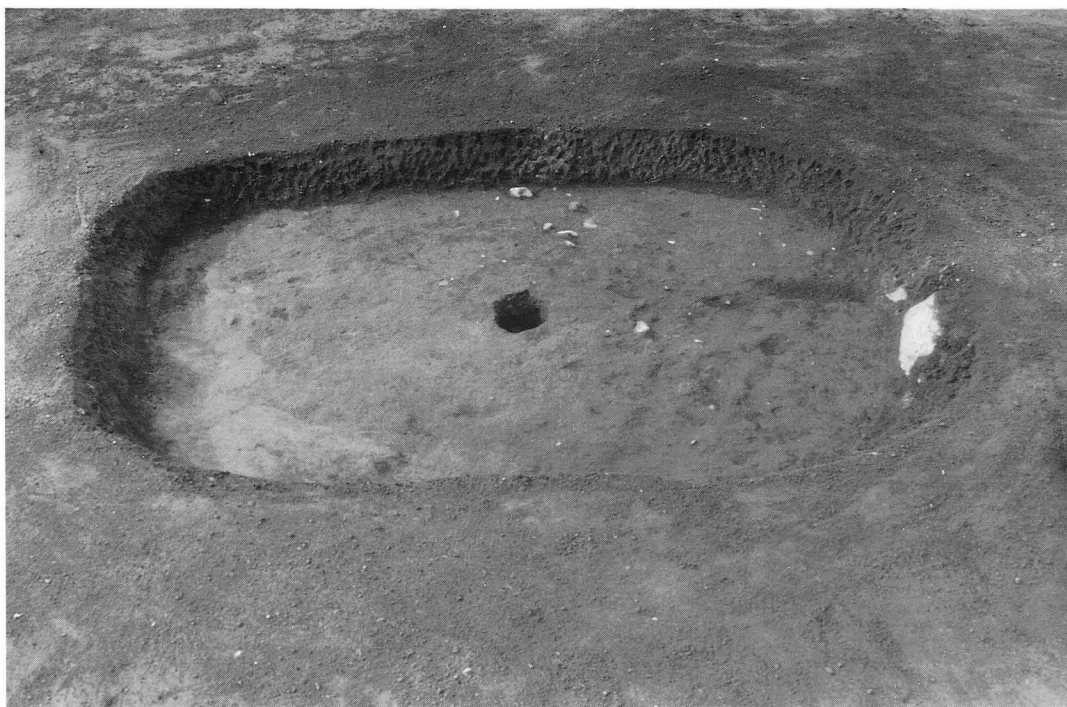
写 真 图 版



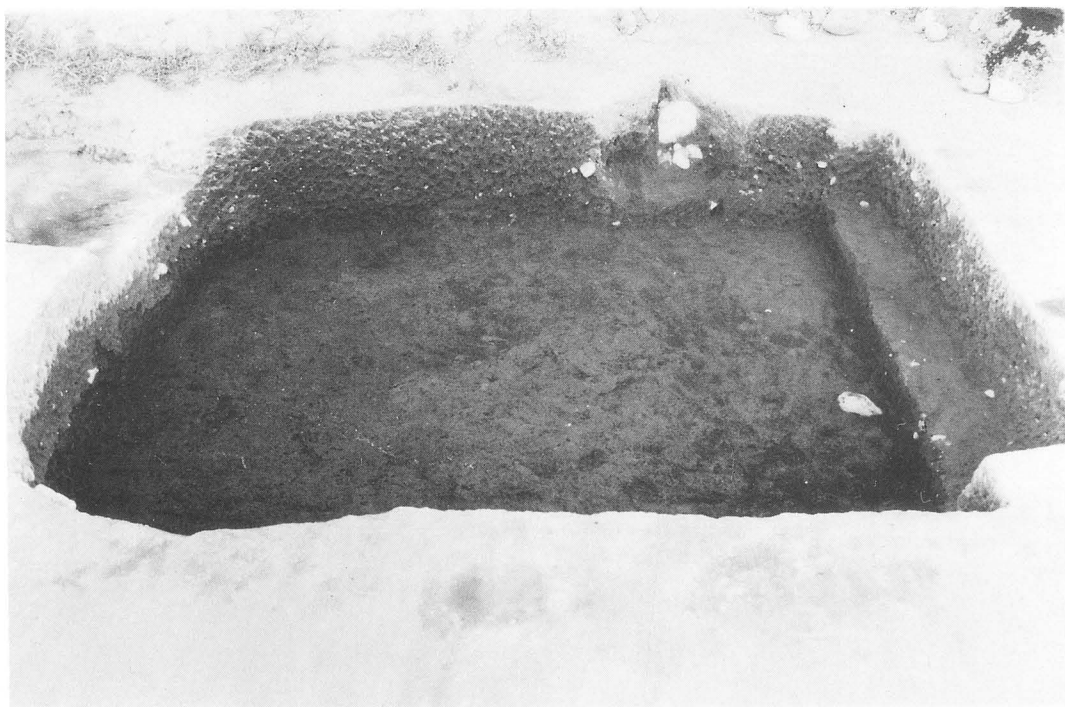
前田遺跡全景



遺跡発掘風景



1号住居址



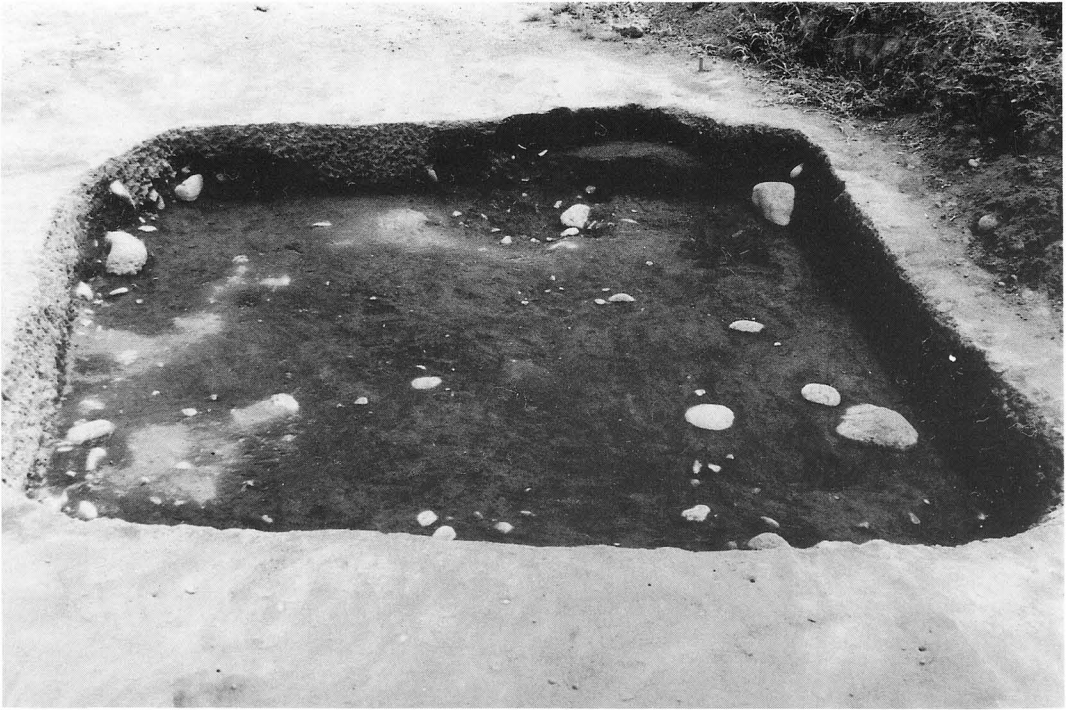
2号住居址



3号住居址



4号住居址



5号住居址



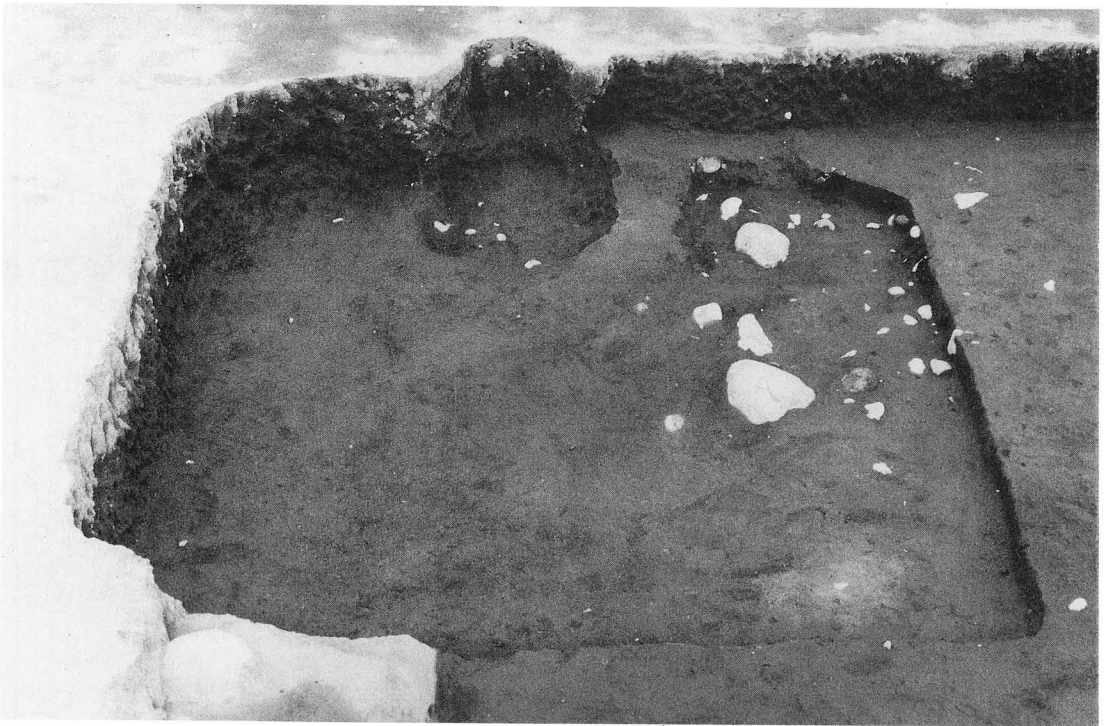
5号住居址
カマド



5号住居址
鉄器出土状態



6·7号住居址



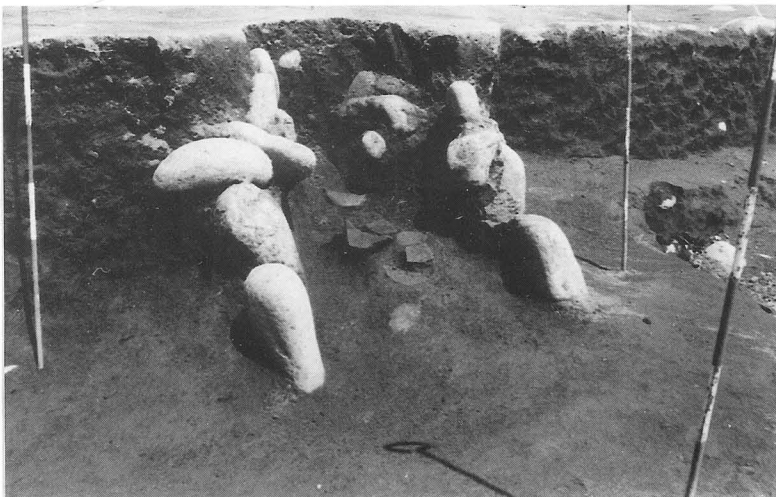
6号住居址



6号住居址



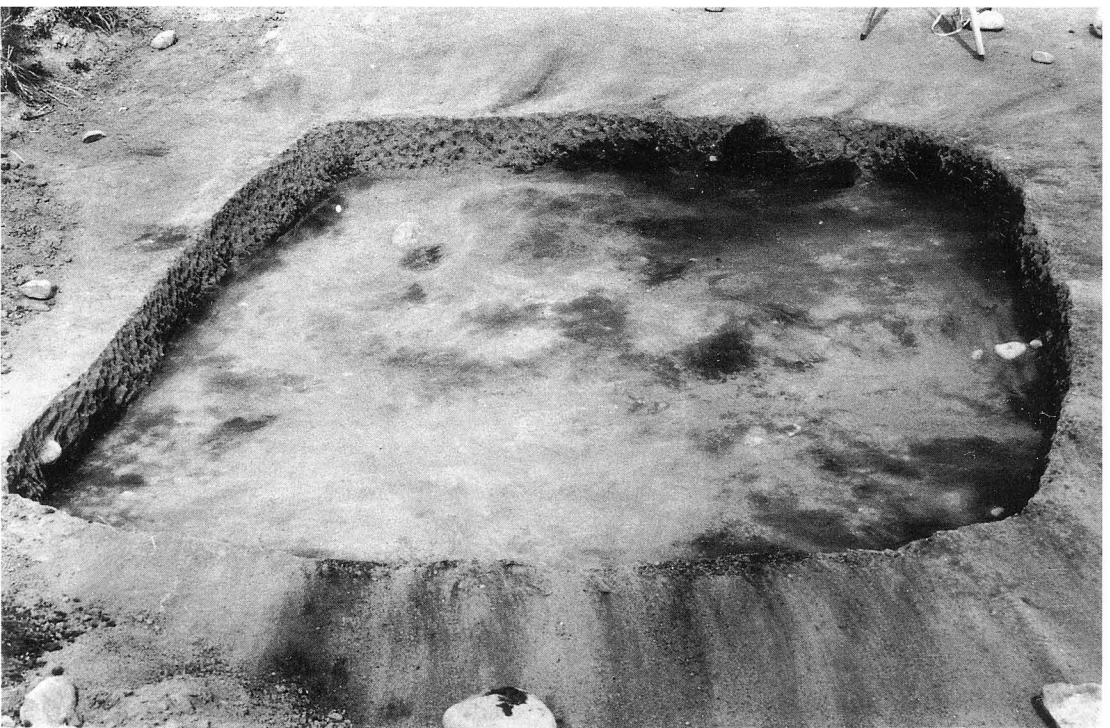
6号住居址
遺物出土状態



6号住居址
カマド



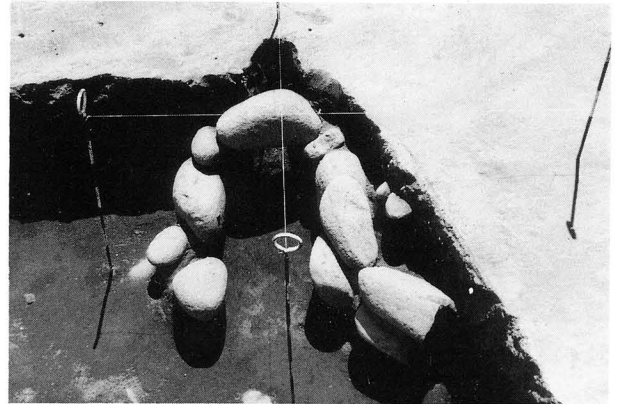
7号住居址



8号住居址



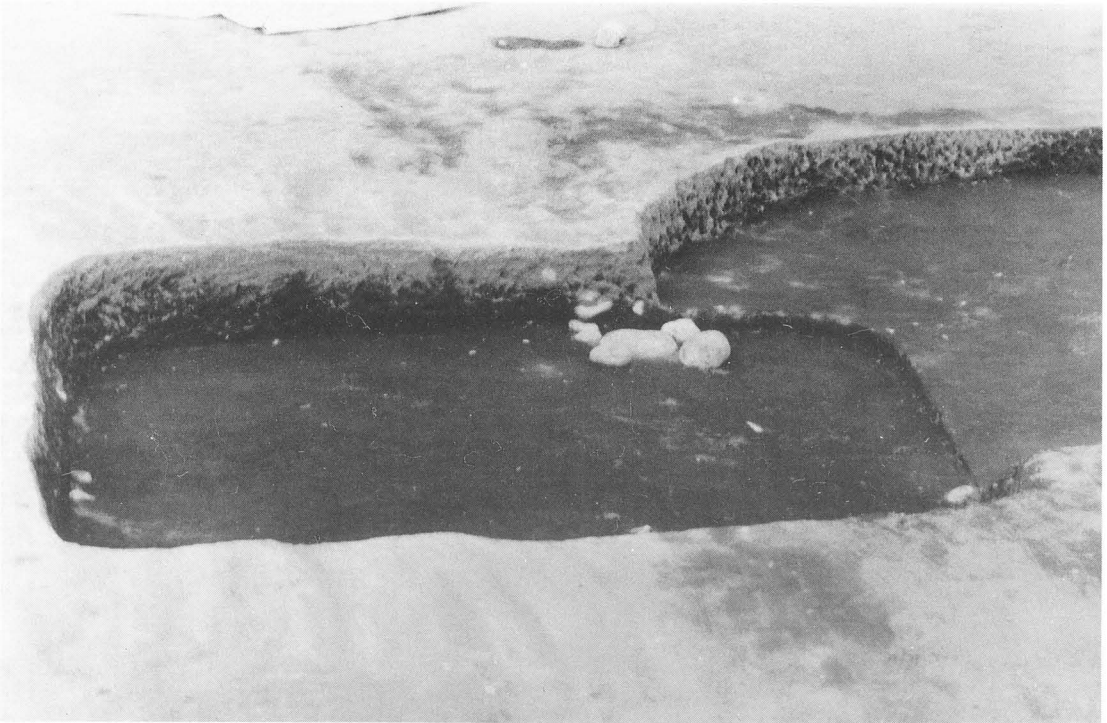
7号住居址
遺物出土



9号住居址
カマド



9号住居址



10号住居址



11号住居址



測量風景

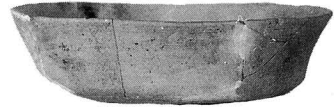


12号住居址

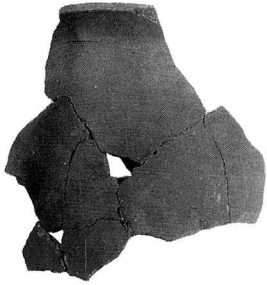


2

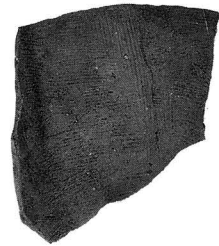
1号住居址出土遺物



1



7



8



9



12



10



13



11

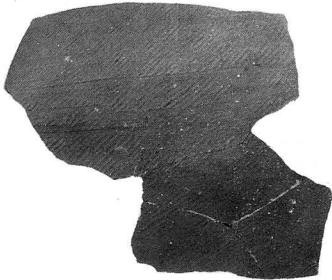
2号住居址出土遺物



1



6

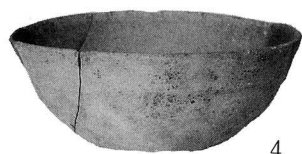


10



14

3号住居址出土遺物



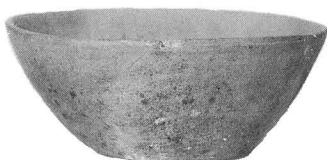
4



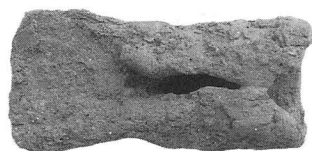
7



8



9



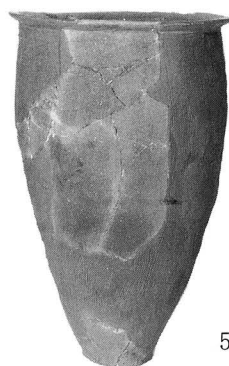
23



25



26



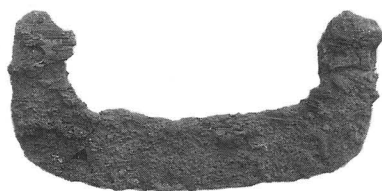
5



6



15



24



28



29



30

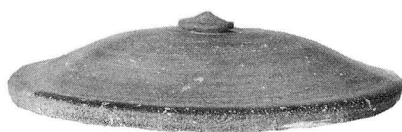


31



32

5号住居址出土遺物



1

4号住居址出土遺物



1



5

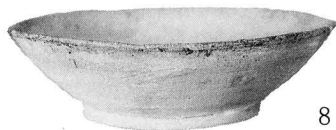


6

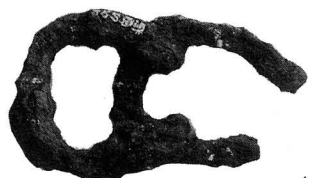


7

7号住居址出土遺物



8

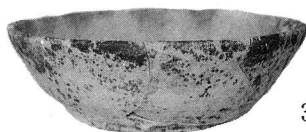


12

8号住居址出土遺物



2



3



4



6

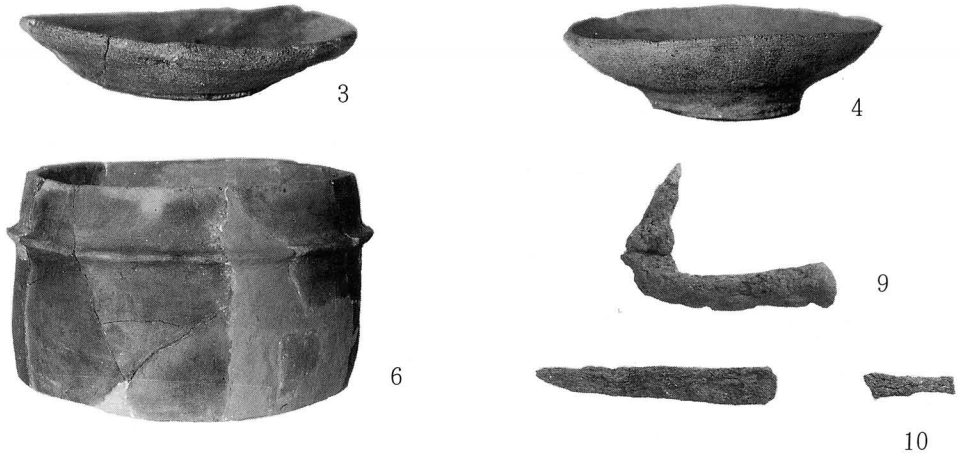


13

6号住居址出土遺物



11



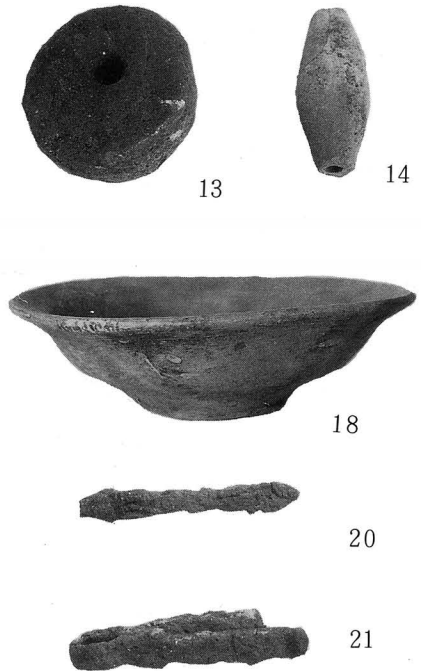
9号住居址出土遺物



11号住居址出土遺物

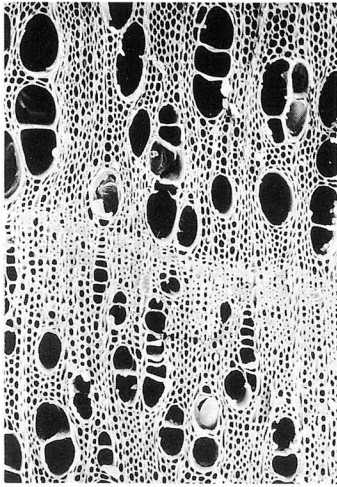


12号住居址出土遺物



遺構外出土遺物

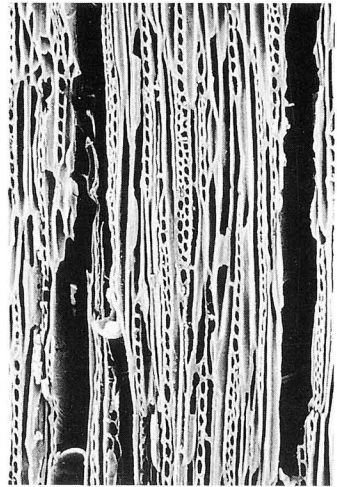
5号住居址出土炭化材顕微鏡写真



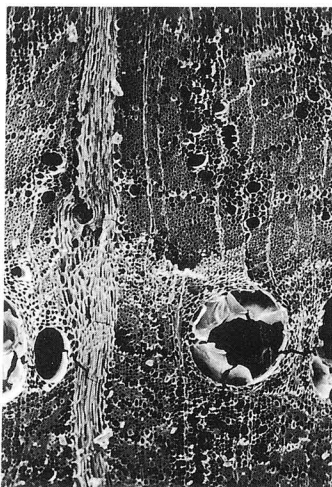
1 a



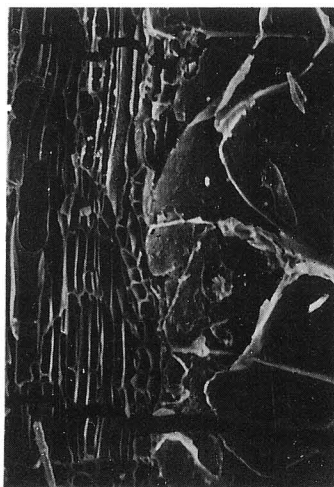
1 b



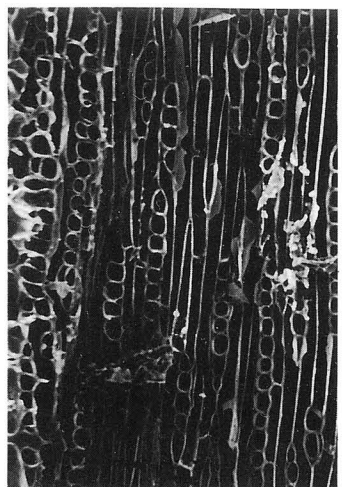
1 c



2 a



2 b



2 c

1 クマシデ属 No.6

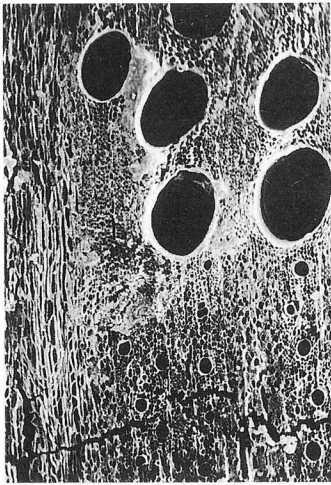
2 コナラ節 No.17

a : 木口×35 (1 aのみ×70)

b : 柁目×140

c : 板目×140

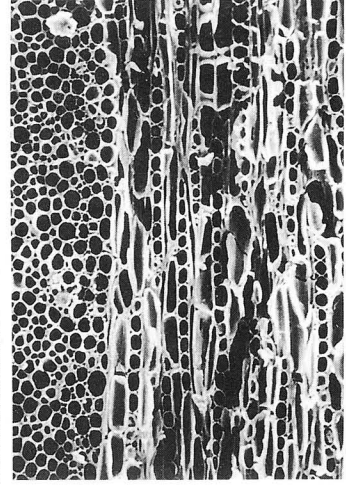
5号住居址出土炭化材顕微鏡写真



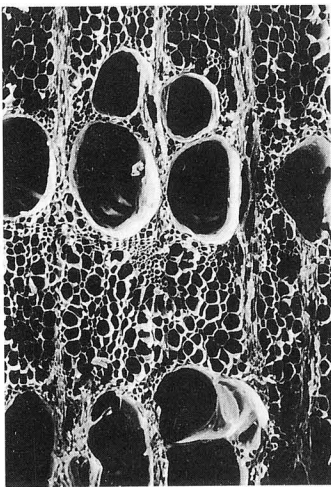
3 a



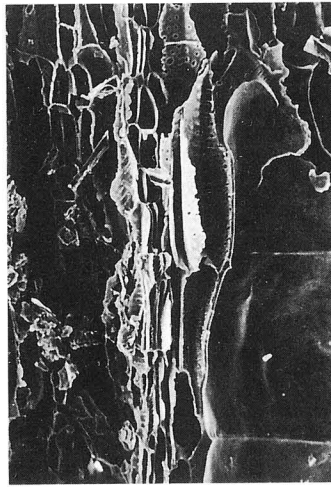
3 b



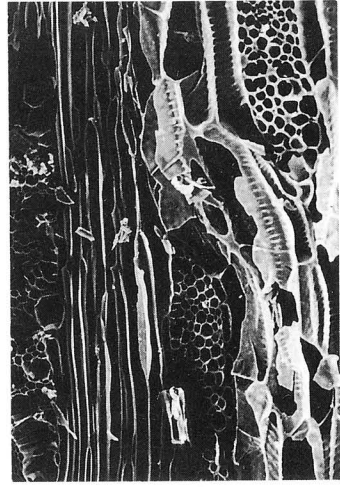
3 c



4 a



4 b



4 c

3 クヌギ節 No. 16

a : 木口×35

4 ケヤキ No. 12

b : 柁目×140

c : 板目×140



5号住居址炭化材出土状况

前 田 遺 跡

発行日 昭和 63 年 3 月 31 日

発 行 韮崎市教育委員会

〒 407 山梨県韮崎市水神一丁目 3 番 1 号

TEL 0551-22-1111 (代)

印 刷 アートプリント社
